

# 唐代ソグド姓墓誌の基礎的考察

福 島 恵

## はじめに

長い中国の歴史のなかでも、唐代は、他の時代と比較して国際色が極めて豊かであったという特徴が、従来しばしば強調される。その理由のひとつは、唐代中国に多くの非漢族が渡来したためであるが、そうした唐在住外国人のなかでも、一般的に最も異国情緒あふれる雰囲気として意識されるのは、イラン系ソグド人であろう。

ソグド人は、アム・ダリアとシル・ダリアの間、現在のウズベキスタンとタジキスタンの一部のソグディアナ地方と呼ばれるオアシスに住んでいたイラン系住民で、遅くとも後漢時代には頻繁に中国に交易に訪れるようになり、以後八世紀中ごろにソグディアナ本土がイスラム化し、シルクロード交易をウイグル商人に取って代わられるまでの約七五〇年間、交易の中心を担う人々であった。

ソグド人に関する研究は、一九〇六年の敦煌文書の発見に始まり、幾多の碩学の研究を経て、近年では固原のソグド墓群（一九八七年

）や安伽墓の彩色石屏風・墓誌（二〇〇〇年）の新発掘が再び拍車をかけ、現在世界各国で歴史・言語・美術など各分野において盛んに行われるようになってきた。

周知のとおり、近年中国では、唐代前後の墓誌が次々と発掘調査されている。墓誌とは、墓主の姓名や功績を讃辞とともに数百ほどの文字にして石材に刻み、墓中に埋めたもので、一九八〇年代以降に発見された唐代墓誌だけでも、その数実に六〇〇〇点を優に超える。もちろんその多くは、漢族の墓誌であるが、非漢族のものも少なくはなく、中でもいわゆるソグド姓（安・康・米・石・史・何・曹など）を持つものも多く含まれている。

ところで、通常、一点の墓誌からは多くの情報が読み取ることができるので、これまではそうした情報を検出し、それによって得られる新知見にもとづいて歴史にスポットをあてようとする研究が多かった。もちろん、それは決して誤った方法ではないが、一方ではそのために、唐三〇〇年に渡って、ソグド人の墓誌はどのようなあ

り方を示すのかという、全体的な傾向を解明する視点が薄れがちであった。

さらには、上記のいわゆるソグド姓のなかでも、石・史・何・曹の姓を名乗るのは、ソグド人だけであるとは限らないので、唐代ソグド人墓誌を分析するにあたっては、一体どこまでをソグド人と認定すればよいのかという問題が、依然として不明瞭なまま残されている。

そこで小論では、ソグド姓を有する墓誌を網羅的に収集・分析し、ソグド姓墓誌のうち、どこまでをソグド人と見て間違いないのか、その方法を提示し、それによって得られる結果を述べてみたい。

## 凡例

・論文中の墓誌銘の表記は、「墓誌銘」〔整理番号〕埋葬年月日〕として示した。整理番号は、著者が便宜上用いた番号で、埋葬年順となっている。

例：「何盛墓誌」〔014〕653 永徽 4. 8. 23〕

・墓誌銘の題名及び引用文の字体は、極力拓本に従った。また、墓誌の記載が不明瞭で読解ができない部分を□と記した。論文中の漢文引用で著者による省略は……と記した。

## 第一節 ソグド姓

唐に在住したソグド人の足跡をたどる際に、まず手がかりとなるのは、いわゆる「ソグド姓」をたどることである。『旧唐書』卷一〇四、哥舒翰伝には、

蕃人多以部落称姓、因以為氏。

とあり、この記載のように、内附した異民族は出身聚落名を姓とすることが多く、ソグド人もその例外ではなかった。ソグディアナ地方には康国・安国・曹国・石国などのオアシス都市が点在しており、それぞれが緩やかな同盟関係にあったとされる。<sup>(1)</sup>『新唐書』卷三二一下、西域伝にはこれらの都市が列記されており、現在以下のように比定されている。<sup>(2)</sup>

安…布豁…捕喝…ブーハーラ (Bukhara)

康…薩末鞬…颯秣建…サマルカンド (Samarkand)

米…彌末…弭秣賀…マリームルグ (Maimurg)

石…柘支…柘折…緒時…タシュケント (Tashkent)

史…佉沙…羯霜那…カシャーナ・キッシュ (Kish)

何…屈霜你迦…貴霜匿…クシャーニヤ (Kushanika)

曹…卒都沙那…蘇對沙那…劫布咄那…蘇都識匿…カブーダナ (Kaboudhan)

現に、「安氏妻康氏墓誌」〔064〕697 萬載通天 2. 4〕には、

夫人康罔大首領之女也。以本罔為氏

という記載が見られ、それぞれの出身都市名を姓としたという従来の見解は、墓誌からも承認できる。この中でも特に安・康・米・石・史・何・曹の七姓が文献に多く登場することから、以下、本稿ではこの七姓を分析対象とする。また、その祖先がソグディアナ地方を出身地とし、かつ内附後出身聚落の名を姓とした者、またその姓を受け継いでいる人々を、本稿では「ソグド人」と称する。

## 第二節 ソグド姓墓誌の分類

## 一、収集

まずはじめに、ソグド七姓（安・康・米・石・史・何・曹）で、唐代（六一八—九〇七年）に埋葬されたものに限って、現在公表されている墓誌をすべて収集した。<sup>3)</sup>

その結果、全件数は一八三件であり、うち一五件は墓誌の存在が後世確認されていたが、現在では散逸したものあるいは、文字部分の破損が激しく誌文を確認することはできなかったものである。また、合葬など個人の情報が得られるものを考慮すると、二〇六八分の記載を確認した（図表1）。

また、『唐代墓誌所在総合目録』による五〇年ごとの出土墓誌数と、今回収集したソグド七姓の全墓誌の五〇年ごとの墓誌数との比率はほぼ同じで、収集対象をソグド姓に限定したことによる、墓誌数比率に特異な偏りは見られなかった。

## 二、判定と分類

収集した墓誌を使用するにあたって、その記載内容に応じて以下の四つに分類した。

## ①ソグド人であるもの（図表2）合計二五件

以下の三つの条件を設け、いずれかを満たしている場合に①と判定した。

第一は、例えば「其先安国大首領」「康国人」などのソグディアナ地方出身であると分かる直接的な表現があること。

第二は、先祖が、ソグド人聚落を統括していたという「薩宝」<sup>(4)</sup>の位に就いていること。ソグド人たちは、キャラバンルートの拠点や貿易の目的地に前進基地として数々の植民聚落を形成した。<sup>(5)</sup> 薩宝は中国内地におけるソグド人植民聚落のリーダーに、中国側から与えられた官名である。この薩宝については、既に多くの研究がある。

藤田豊八氏は「通商の目的を以て支那に旅居せるIran系の所謂賈胡若しくは商胡には、自らその間に商主があり、政府はそをして賈胡即ち商胡を統制せしめ、商主の外国名なる薩宝を以てその官名としたのであらう。」と指摘され、護雅夫氏はソグドの植民聚落に対して、「植民聚落では社会構成においても、行政機構においても、大筋では本国のそれらを模倣する」というソ連のクリヤシュトルヌイの説に依拠し、中国においても本国の制が行われていたものとされた。<sup>(7)</sup> さらに羽田明氏は「薩宝の統治下に、ソグド人の隊商や在留者は広州の在留のイスラム教徒と同じように、自治を許されていたのだらう。」と推測された。また、言語学の見地から、吉田豊氏は薩宝（漢字の中古音はsatpau）が「キャラバン隊のリーダー」を意味するソグド語の *satpaw* の漢字音写であることを明らかにし、これにより、薩宝がソグド人特有の官職であるとされている。<sup>(9)</sup> さらに荒川正晴氏は墓誌資料を使い、北朝隋唐時代に置かれた薩宝の役割を、北魏から隋にかけては「領内に居留するソグド人の聚落を統括させるための」自治的聚落の統治者であったが、唐ではソグド人の多くが信仰していた祆教（ゾロアスター教）の「祠およびそこに集う祆教徒の管理を掌管する官」と職務に変化が見られることを指摘されている。<sup>(10)</sup> これらの研究より、薩宝という官職がソグド人への

墓誌所在												
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)
					新疆118	延壽006			13738	7-498		吐魯番177
						延壽004			13738	7-497		吐魯番175
						延壽011			13739	7-498		吐魯番183
						貞觀018			13750	3-313	陝西2-5	
						統一直觀032			13798			吐魯番219
	11-134	1-95			洛陽2-89	116	貞觀111		13816	3-331		
						126	貞觀139		13838	6-240		
175右中		10-957					貞觀181		12881			石文2-27
							貞觀182		13868	7-250		石文4-995
					北大1-36		永徽008			4-318		
166右下	12-87	3-222			洛陽3-68		永徽076		13917	4-328		石文2-330
167左上	12-100	3-231			洛陽3-79		永徽086		13922	4-331		
167左上	12-101	3-232			洛陽3-80		永徽087		13922	4-332		石文2-332
		3-233				169	永徽088		13923	4-332		
							永徽104		13934	7-501		吐魯番239
									13943	2-129	陝西2-補9	
										7-260		固原43
	13-58	4-340			洛陽3-194		顯慶059		14002	2-149		
												勉成
168左中	13-64	4-342		67	洛陽3-198	210	顯慶064		14005	6-261		
	13-121	4-381	142		洛陽4-17		顯慶108		14035	2-160		
	13-131	4-388	143		洛陽4-21		顯慶116		14039	2-161		
	13-193	5-439	166		洛陽4-72		顯慶169		14067	2-171		
					洛陽4-73	248	統一龍朔001		14070	5-124		
					洛陽4-96	249	統一龍朔007		14085	5-125		
170左中	14-80	6-510			洛陽4-142		龍朔075		14117	6-294		石文2-350
					陝西1-35		統一麟德002		14133	3-385	陝西2-37	
										7-272		固原43
171左中	14-144	6-569		123	洛陽4-196	279	麟德047		14159	3-391		石文2-291
					洛陽5-12	292	統一乾封004		14185	5-132		
					陝西3-74		統一乾封014		14210	3-404	陝西1-72	
172左中	15-94	7-674		149	洛陽5-75	309	總章033		14238	5-150		石文2-359
	15-95	7-675			洛陽5-77		總章035		14238	3-412		
		8-715	265		洛陽5-109		咸亨029		14272	2-234		
										7-284		固原67
										7-285		固原82
	15-162	8-733	273		洛陽5-125		咸亨051		14289	2-243		
		8-743					咸亨060		14296	7-289		
					新疆171		統一咸亨019		14307	7-290		吐魯番277
	15-191	8-763		166	洛陽5-153		咸亨082		14314	5-165		
	15-193	8-766			洛陽5-155	330	咸亨085		14315	4-371		
	15-198	8-770			洛陽5-159		咸亨089		14317	5-428		
							咸亨102		14329	7-293		吐魯番280
173左中	15-213	8-782		173	洛陽5-171	338	咸亨103		14330	5-171		石文2-366
173左中		8-783					咸亨104		14331	7-294		石文2-261
173右中	16-28	9-820		185	洛陽5-198	346	上元028		14359	5-178		石文2-294
	16-65	9-847	305		洛陽6-10		儀鳳011		14385	2-266		
		9-859					統一儀鳳015		14397	4-376		固原93
	16-108	9-885		196	洛陽6-43		調露008		14409	3-448		
	16-110				北京1-78		調露009		14410	4-377		
174右中	16-121	10-901		198	洛陽6-51	364	調露024		14418	3-449		石文2-295
	16-122	10-902	325		洛陽6-52		調露025		14419	2-276		
175左上	16-157	10-916			洛陽6-64		永隆016		14428	3-452		石文2-374
175左中	16-176	10-933		203	洛陽6-78	370	永淳013		14444	3-453		石文2-262
175左中	16-177	10-931		200	洛陽6-79		永淳014		14445	3-454		石文2-262
					陝西3-98		統一光宅003		1958	1-67	陝西1-89	
					陝西3-108		統一載初005		14543	3-481		
					陝西3-110		統一天授002		14546	7-320		
									14582	6-336		
		12-1137	410		洛陽7-21		長壽019		14598	2-325		
	18-33	12-1151	417		洛陽7-31		長壽031		14609	2-330		
					山西55		統一証聖002		14627	6-340		石文2-331
					洛陽7-52		統一証聖003		14630	7-503		
					洛陽7-97		統一方載通天008		14657	5-231		
												文物04-1
					洛陽7-113		統一神功001		14671	5-236		
		13-1282					統一久視003		14724	6-349		
									14746	6-356	陝西2-66	

〈図表 1〉 収集したソグド姓墓誌

整理番号	判断	墓誌銘	葬年	姓	諱	字	性	卒年月日	生年	没年齢
001	③	史伯悦墓表	631延寿8.12.27	史	伯悦		男			68
002	④	曹氏妻蘇氏墓表	631延寿8.1.1	蘇			女			64
003	③	曹武宣墓誌	632延寿9.11.1	曹	武宣		男			68
004	③	何氏墓誌	631貞觀5.1	何				631貞觀5.1	556	76
005	③	曹氏墓表	642貞觀16.6.6	何	曹					
006a	④	何相及妻尹氏墓誌	645貞觀19.9.7	何	相	元輔	男	645貞觀19.8.17	587	59
006b	④			何	尹		女	628貞觀2.3.2		
007	①	康婆墓誌	647貞觀21.9.1	康	婆	季大	男	647貞觀21.8.14	573	75
008	③	曹内墓誌	627-649貞觀間	曹	内	龍夫	男			
009	①	康阿達墓誌	627-649貞觀間	康	阿達		男			
010a	②	曹諒及妻安氏墓誌	650永徽1.7.9	曹	諒	叔子	男	614大業10.7.2		
010b	②			安	安		女	650永徽1.6.1	565	86
011a	②	安延及妻劉氏墓誌	653永徽4.3.28	安	延	貴薩	男	642貞觀16.7.20	559	84
011b	④			劉	劉		女	653永徽4.4.7	571	83
012	④	史氏妻田氏墓誌	653永徽4.8.11	田			女	653永徽4.7.23	571	83
013	③	曹氏墓誌	653永徽4.8.21	曹			男	653永徽4.7.28	594	60
014	①	何盛墓誌	653永徽4.8.23	何	盛	多子	男	653永徽4.7.19	574	80
015	④	史伯悦妻柳氏墓表	654永徽5.4.19	柳			女			64
016	①	安萬通墓誌	655永徽5.12.1	安		萬通	男			69
017	①	史崇威墓誌	658顯慶3.12	史	崇威	元貞	男	656顯慶1.5.13	579	78
018	②	史靜墓誌	657顯慶2.12.19	史	靜	處冲	男	657顯慶2.11.22	596	62
019a	①	史道洛墓誌	658顯慶3.12	史	道洛		男	655永徽6.1.28	591	65
019b	②			康			女	646貞觀20.2.12	592	55
020	④	曹氏妻慕容氏墓誌	658顯慶3.1.23	慕容	麗	仙娥	女	657顯慶2.7.16	593	65
021	②	史陳墓誌	659顯慶4.8.16	史	陳	景	男	633貞觀7.3.27	555	79
022	②	安度墓誌	659顯慶4.11.7	安	度	善通	男	659顯慶4.10	582	78
023	②	康氏妻史氏墓誌	661龍朔6.3.7	史			女	661龍朔6.2.23	626	36
024	③	史行簡墓誌	661龍朔1.3.11	史	行簡	辰敬	男	663龍朔5.4.30	625	36
025	③	何光墓誌	661龍朔1.11.18	何	光	昭德	男	661龍朔1.9.27	590	72
026a	②	安師墓誌	663龍朔3.9.20	安	師	文則	男	657顯慶2.1.10	601	57
026b	②			康			女	663龍朔3.8.21	610	54
027	③	何剛墓誌	664麟德1.2.24	何	剛	僧景	男	664麟德1.2.9	589	76
028	①	史崇威夫人安娘墓誌	664麟德1.11.16	安	娘	白	女	661龍朔1.1.12	590	72
029	②	史信墓誌	665麟德2.7.12	史	信	安期	男	665麟德2.6.25	600	66
030	③	史伯龍墓誌	666乾封1.7.21	史	伯龍		男	666乾封1.7.8	576	91
031	②	曹欽墓誌	667乾封2.11.5	曹	欽	毛良	男	667乾封2.4.10	594	74
032	②	康達墓誌	669絳章2.7.8	康	達	文則	男	669絳章2.6.2	608	62
033a	③	曹德及妻淳于氏墓誌	669絳章2.8.26	曹	德	建德	男	649貞觀23.3.12	575	75
033b	④			淳于	淳于		女	669絳章2.6.17	584	86
034	①	康敬本墓誌	670咸亨1.□.14	康	敬本	延宗	男		4	□
035a	①			史	阿託	說	男	669絳章2.9.23	584	86
035b	②	史阿託墓誌	670咸亨1.11.27	康	景		女	630貞觀4.9.10	611	20
035c	④			康	那		男	667乾封2.1.1	614	54
036	①	史鐵棒墓誌	671咸亨1.12.13	史	鐵棒	善集	男	666乾封1.8.13	623	44
037a	①	康武通墓誌	672咸亨3.2.22	康	武通	宏達	男	649貞觀23.5.19	585	65
037b	④			康	唐		男	672咸亨3.1.22	601	72
038	③	何棟墓誌	672咸亨3.8.14	何	棟	元慶	男	672咸亨3.1.22	626	47
039	②	史住墓誌	673咸亨4.2.16	史	住		男	673咸亨4.2.16	597	77
040	④	史氏妻王氏墓誌	673咸亨4.4.5	王			女	673咸亨4.3.22	593	81
041	①	康元敬墓誌	673咸亨4.5.29	康	元敬	留師	男	673咸亨5.7	608	66
042	③	曹德墓誌	673咸亨4.8.14	曹	德	景澈	男	673咸亨4.8.5	594	80
043	③	曹德明妻董氏墓誌	674咸亨5.2	董		□□	女	674咸亨3.6	603	72
044	③	史氏墓誌	674咸亨5.2.29	史			男	674咸亨5.1.25	602	53
045	②	曹氏妻何氏墓誌	674咸亨5.4.6	何			女	674咸亨5.3.25	625	50
046	④	史氏妻柳氏墓誌	676上元3.1.22	張			女	675上元2.12.5	596	80
047	②	康氏妻曹氏墓誌	677儀鳳2.11.26	曹			女	677儀鳳2.10.5	593	85
048	①	史道德墓誌	678儀鳳3.11.8	史	道德	萬安	男	678儀鳳3.3.19	613	66
049	①	康統墓誌	679調露1.10.8	康	統	善達	男	678儀鳳2.12.12	624	55
050a	④	曹宮墓誌	679調露1.10.13	曹	宮	善進	男	676上元2.10.17	594	83
050b	④			張		1.3	男		59	
051	②	安神儀墓誌	680調露2.2.28	安	神儀		男	680調露2.1.26	623	58
052	②	何摩阿墓誌	680調露2.2.28	何	摩阿	迦	男	680調露2.2.16	630	51
053a	②	康欽墓誌	681永隆2.8.6	康	欽	仁德	男	656顯慶1.2.18	592	65
053b	②			曹			女	681永隆2.6.1	607	75
054	②	康留買墓誌	682永淳1.10.14	康	留買		男	682永淳1.7.17		
055	②	康摩伽墓誌	682永淳1.	康	摩伽		男	682永淳1.4.3		
056	①	安元壽墓誌	684光宅1.10.24	安	元壽	茂齡	男	683永淳2.8.4	607	77
057a	④	任智才及妻史氏墓誌	690載初1.7.8	任	智才		男	660顯慶5.1.3	599	62
057b	③			史			女	676上元3.6.7	617	60
058	③	安範墓誌	690天授2.1.30	安	範	興孫	男	689永昌1.2.23	626	64
059	①	康宜德墓誌	692天授3.4.1	康	宜德	有鄰	男	692天授3.3.17	627	66
060a	②	安懷及妻史氏墓誌	693長壽2.8.3	安	懷	道	男	683永淳2.8.12	631	53
060b	②			史			女	693長壽2.1.2	630	64
061a	②	康智墓誌	694長壽3.4.7	康	智	威	男	693長壽2.2.23	623	71
061b	④			史			女	咸亨中		
062a	③	史愛及妻田氏墓誌	694証聖1.1.17	史	愛	季冲	女			
063	②	羅氏妻康氏墓誌	695証聖1.3.23	康			女			
064	①	安氏妻康氏墓誌	697万歲通天2.4.29	康			女	697万歲通天2.4.16		
065	③	康文通墓誌	697神功1.10	康	文通	懿	男	696万歲通天1.7	618	79
066a	③	曹玄機及妻陳氏墓誌	697神功1.10.22	曹	玄機	賢	男	691天授2.8.19	619	73
066b	④			陳			女			
067	①	何口墓誌	700久視1.9.28	何	口	口	男	700久視1.9.7	614	85
068a	②	史懷剛墓誌	702長安2.5.30	史	懷剛	中晦	男	662龍朔2.6.10	□	□
068b	④			李			女	690天授1.10.26	621	70

墓誌所在												
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)
	19-69				北京1-104		長安035		14771	5-270		
		14-1345			北大1-106	419	長安036		14771	6-362		
180右上	20-6	14-1383			北大1-109		神龍004	5-續拾1-3下	2396	3-36		石文1-306
					新羅192		神龍014		14803	7-343		吐魯番308
	20-19	14-1393			洛陽8-62		神龍016		14805	5-280		
		15-1463				444	景龍003		14851	4-402		
	20-142	16-1520		263	洛陽8-167		太極002		14874	7-504		
	21-54	16-1566	585		洛陽8-209		開元038		14913	2-426		
					陝西1-99		統一開元036		14956	2-442	陝西1-118	
									14961			
					洛陽9-86		統一開元048		14981	6-397		
184左上	22-23	17-1687			洛陽9-98	469	開元164		14987	6-399		石文2-401
184左下	22-40	18-1706			北大1-126		開元183	5-拾遺65-326中	15002			石文4-363
					北京3-175		開元193·殘誌005	5-拾遺47-240中	2368· 10896	3-58		石文4-262· 496
		18-1775			陝西1-107		統一開元080		15034	2-470	陝西1-121	
					陝西1-110		開元274		15045	5-349	陝西2-89	
	23-23		694		洛陽10-3		開元305		15057	2-481		
				292	洛陽10-21		開元323		4644	4-20		
	23-128		739		洛陽10-91		開元401		15109	2-503		
			771		洛陽10-147		開元467		3794	1-140		
	24-127			309	洛陽10-188		開元517		15165	4-438		
							開元543		15176	7-36		
188左下	25-14				洛陽11-13		天寶013		12882	3-72		石文2-224
							天寶013		4702	6-70	陝西2-補21	
					陝西1-128		統一·天寶019		4716	3-75		
189左下	25-142				山西119		天寶121		15223	4-456		石文1-699
	25-160		845		洛陽11-113		天寶139		15228	2-544		
	26-11				洛陽11-125							
	26-7			324	洛陽11-121		天寶146		15234	5-382		
					陝西4-14		統一·天寶067		15244	5-387		
					陝西1-141		統一·天寶094		4739	3-97	陝西2-133	
					洛陽12-19	572	統一·聖武003		4752	6-88		
					陝西1-150		統一·乾元009		5336	3-107		
					陝西4-33		統一·永泰001		15307	5-408		
					大曆043				15323			石文4-711
					河南84		統一·大曆036			5-31		
					陝西1-159		統一·大曆041		12528	1-209	陝西2-157	
									15344	6-466		
					陝西4-47		建中015		5408	1-212		
									5925			
					陝西4-56		統一·貞元030		5399	3-128	陝西1-141	
							統一·貞元031		6951	1-225		
	28-129				北京2-23		貞元078		15368	4-472		
					陝西2-25		統一·永貞003		7722	3-143	陝西2-191	
	29-28				洛陽12- 204·205	624	元和019·統一 元和006		7751	3-146		
	29-31				北京2-34		統一·元和009		5615	3-147	北京17	
	29-51				山西148		元和035		8110	3-153		石文4-716
										6-134		
	29-73		1000		洛陽13-10		元和054		12572	1-264		
199右上					北大2-51		元和061	5-拾遺66-330上	15397			石文4-851
					山西151		統一·元和056		15402	6-478		
					洛陽13-22		統一·元和058		15402	4-480		
200右中	29-106				北大2-59		元和106		15407	4-481		石文4-613
							元和108		8223	7-93		
	29-155				洛陽13-49	640	元和143		15412	5-429		
					陝西4-85		統一·長慶002		15415	5-431		
			1025		洛陽13-67		長慶030		8520	1-286		
202左下	30-53				北大2-80		寶曆008	5-拾遺66-330上	15422			金補卷78-4 石文1-596
	30-65				北大2-83		寶曆016		8611	4-112		
202右下	30-72				北大2-87		大和002		12573	4-120		石文4-620
							統一·大和004		8693	3-190	北京23	
					洛陽13-94		統一·大和013		15427	4-489		洛新105
					陝西4-104		統一·大和022		8728	2-49		
					陝西4-107		統一·大和020		8707	1-282		
205右中							大和091		8094			石文2-53
						658	統一·開成009		8921	6-149		
					陝西4-116		統一·開成012		8923	1-314		考文90-4
208左下							金昌044		15454			石文2-56
208右上	31-146				北京2-97		金昌047		15454			石文1-552
	32-7				北大2-111		大中005		9412	4-177		

整理番号	判断	墓誌銘	葬年	姓	諱	字	性	卒年月日	生年	没年
069a	②	史善法及妻康氏墓誌	703長安3.4.18	史	善法	饒仁	男	702長安2.11.3	628	75
069b	②			康	部	慶	女	702長安2.4.29	660	63
070	②	康節墓誌	703長安3.4.23	康	節	節	男	704長安4.11.23	645	60
071	①	安令節墓誌	705神龍1.3.5	安	令節	令節	男	705神龍1.10.24		
072	②	康重妻康氏墓表	705神龍1.10.30	康	重	重	女	705神龍1.6.4		
073	②	康氏墓誌	705神龍1.11.26	康	重	重	男	664麟德1.11.7	601	64
074a	①	安善及妻何氏墓誌	709景龍3.10.26	安	善	善	男	704長安4.1.20	622	83
074b	②			何	善	善	女	711景雲2.10.24	634	78
075	③	何氏墓誌	712太極1.2.10	何	善	善	男	716開元4.4.11	659	58
076	②	安思節墓誌	716開元4.5.27	安	思節	思節	男	720開元8.5.22	655	66
077	④	史氏妻裴氏墓誌	721開元9.2.25	裴	思節	思節	女	720開元8.10.21	649	72
078a	③	康固及妻趙氏墓誌	721開元9.10.11	康	固	義威	男	687垂拱3.3.21	651	37
078b	④			趙	固	固	女	7.1		
079	③	曹公墓誌	722開元10.8.27	曹	威	賓	男	722開元10.□.30	663	60
080a	③	康威墓誌	723開元11.2.13	康	威	賓	女	712太極1.3.6		
080b	④			韓	威	賓	男	723開元11.10.8	684	40
081	③	曹氏墓誌	723開元11.11.23	曹	明照	明照	男	723開元11.11.14	656	68
082	③	石暎墓誌	724開元12.4	石	暎	先進	男	727開元15.2.29		
083	②	安元壽妻董六娘墓誌	727開元15.2.29	董	六娘	六娘	女	727開元15.12.16		
084	④	薛府君及夫人史氏墓誌	728開元16.4	史	強	強	男	724開元12.16.4		
084b	②			史	待賓	待賓	男			
085	③	史待賓墓誌	730開元18.閏6.23	史	待賓	待賓	男	731開元19.2.26		
086	④	曹夫人胡明期母	731開元19.4.7	安	孝臣	孝臣	男	734開元22.3.8	699	36
087	③	安孝臣墓誌	734開元22.4.9	安	孝臣	孝臣	男	735開元26.春	667	70
088	③	何氏墓誌	738開元26.4.11	何	庭蘭	庭蘭	男	740開元28.9.□	676	65
089	②	康庭蘭墓誌	740開元28.10.17	康	庭蘭	庭蘭	男			
090	③	石信墓誌	開元攝提格十月	石	信	信	男	742天寶1.6.19	686	57
091	③	何簡墓誌	742天寶1.7.30	何	簡	弘操	男	744天寶2.12.14	701	44
092	③	史曜墓誌	743天寶2.12.23	史	曜	慕倫	男	744天寶3.8.20	668	77
093	②	史思禮墓誌	744天寶3.11.23	史	思禮	伯珪	男	745天寶3.12.28	678	68
094a	③	何知猛墓誌	748天寶7.5.27	何	知猛	元瑛	女	748天寶7.5.27	689	60
094b	④			王	庭	南山	男	739開元27		
095	③	史庭墓誌	748天寶7.11.□	史	庭	南山	男			
096	③	康怡墓誌	749天寶8.10	康	怡	怡	男	749天寶8.6.9	672	78
097	②	康氏妻董氏墓誌	749天寶8.8.10	董	禮	禮	女	727開元15	648	60
098a	④	焦禮及妻曹氏墓誌	751天寶10.3.1	焦	禮	禮	男	750天寶9.7.12		
098b	③			曹	禮	禮	女	754天寶13.7.23	684	71
099	②	何德墓誌	754天寶13.10.23	何	德	伏德	男	756聖武1.8.26	671	86
100a	②	曹氏妻康氏墓誌	757聖武2.閏8.9	曹	當	當	女	757聖武2.7.14	687	71
100b	①			康	當	當	男	758乾元1.2.25	702	57
101	②	康君妻康氏墓誌	760乾元3.2.22	康	暉	懷智	男	765上元2.7.2	602	74
102	③	康暉墓誌	765永泰1.6.21	康	暉	懷智	男	775大曆10.6.19	729	47
103	②	曹閏國墓誌	775大曆10.8.6	曹	閏國	閏國	男	775大曆10.8.24	724	52
104	③	何樵墓誌	775大曆10.8	何	樵	琳甫	男			
105	②	曹惠琳墓誌	779大曆14.4.27	曹	惠琳	惠琳	男	782建中3.2.22	706	77
106	②	安文光夫人康氏墓誌	782建中3.4.20	康	景林	景林	女	782建中3.7	730	53
107	②	康景林墓誌	782建中3.9	康	景林	景林	男			
108	④	何廷康氏墓誌	784貞元1.□	何	廷	廷	女	793貞元9.11.15	727	67
109a	①	李元光及妻阿史那氏墓誌	794貞元10.11.28	阿史那	元光	元光	男	771大曆6.10.27	721	74
109b	④			史	元光	元光	女	794貞元10.7.21	721	74
110	③	常康河南史氏墓誌	795貞元11.2.11	史	崇俊	考德	男	797貞元13.2.20	717	81
111	①	石崇俊墓誌	797貞元13.8.19	石	崇俊	考德	男	785貞元1.9.21	694	92
112	①	米維芬墓誌	805永貞1.12.19	米	維芬	維芬	男			
113	③	曹又墓誌	807元和2.10.19	曹	又	元意	男	792貞元8.9.19	717	76
114a	③	史光墓誌	808元和3.1.27	史	孫	重明	女	808元和2.12		
114b	④			何	載	載	男	809元和4.8	743	67
115	③	何載墓誌	809元和4.11.9	何	載	載	男	812元和7.5.20	783	30
116	③	史夫人墓誌	812元和7.5.25	史	邊	邊	女	812元和7.8.1	744	69
117	④	何氏妻邊氏墓誌	812元和7.8	邊	忠良	忠良	男	813元和8.1.17	719	55
118	②	石神福墓誌	813元和8.2.18	石	神福	神福	男	808元和3.10.23	716	93
119a	④	田鸞及妻齊郡史氏墓誌	814元和9.10.6	田	鸞	鸞	女	814元和9.8.9	750	65
119b	③			史	鸞	鸞	男	815元和10.5.12	747	69
120	④	威君及高平郡曹氏墓誌	815元和10.仲秋.22	威	鸞	鸞	男	817元和12.□.13	745	73
121	②	石默啜墓誌	817元和12.8.24	石	默啜	默啜	男	817元和12.閏5.22	744	74
122	③	李氏妻石氏墓誌	817元和12.9.24	石	琳	琳	女	820元和15.1.24	742	79
123	②	曹琳墓誌	820元和15.7.9	曹	琳	琳	男	821長慶1.5.10	768	54
124	②	康志遠墓誌	821長慶1.5.25	康	志遠	志遠	男	824長慶4.10.14	792	33
125	③	王氏妻曹氏墓誌	824長慶4.11.25	曹	志遠	志遠	女			
126	②	石忠政墓誌	825寶曆1.8.21	石	忠政	不郭	男	長□2.7.10		82
127	③	何洪墓誌	826寶曆2.8.19	何	洪	洪	男	826寶曆2.8.5		
128	③	何允墓誌	827太和1.5	何	允	允	男	827太和1.5.25	773	55
129	④	曹朝康妻薛氏墓誌	827太和1.10.3	薛	允	允	女	827太和1.9.3	771	57
130	④	曹氏妻陳氏墓誌	828太和2.7.18	陳	允	允	女	821長慶1.5.17	749	73
131	④	楊受及妻石氏墓誌	829太和3.10.26	楊	受	受	男	829太和3.5.17	769	61
132a	①	何文哲墓誌	830太和4.10	何	文哲	子洪	男	830太和4.4.1	764	67
132b	②			康	文哲	文哲	女	797貞元13.6.19	752	46
133	④	安氏妻與氏墓誌	835太和9.5.28	與	文哲	文哲	女	835太和9.□.5	783	53
134	③	史翁如墓誌	837開成2.2.20	史	翁如	翁如	男			
135	④	何少直妻蘭氏墓誌	837開成2.10.25	蘭	翁如	翁如	女	837開成2.7.7	777	61
136	③	陸氏妻何氏墓誌	845會昌5.9.26	何	米	米	女	845會昌5.□.21	778	68
137	③	米九娘墓誌	846會昌6.□.19	米	米	米	女	846會昌6.□.5	826	21
138	③	張蘇寒史氏墓誌	847大中4.1	史	米	米	女	847會昌7.1		

[illegible]



整理番号	判断	墓誌銘	葬年	姓	諱	字	性	卒年月日	生年	没年
139	③	史塔留墓誌	847大中1.閏3.8	史	塔留		男	847大中1.閏3.4	811	35
140	②	曹慶墓誌	847大中1.7.21	曹	慶	宗禮	男	847会昌6.12.15	799	49
141a	④	曹氏及妻張氏墓誌	847大中1.10.14	曹	芳	成丞	男	847大中1.2.7	781	67
141b	④			張			女	837開成2.4.19	787	51
142	③	契苾公妻何氏墓誌	847大中1.10.2	何			女	846会昌6.12.24	789	58
143a	②	米文辯及妻馬氏墓誌	849大中3.2	米	文辯		男	848大中2.2	794	55
143b	②			馬			女			
144	②	安珍墓誌	850大中4.10.5	安	珍		男	850大中4.5.5	767	84
145a	④	饒公及妻曹氏墓誌	851大中4.11.28	饒			男	847大中4.11.11	777	71
145b	④			曹			女	844会昌4.11.28	777	68
146	③	史從慶墓誌	851大中4.12.17	史	從慶		男	848大中2.12.4	791	58
147	④	曹氏妻張氏墓誌	852大中6.9.10	張			女	845会昌5.12.24	791	55
148	②	康氏墓誌	853大中7.10	康			男	853大中7.7.19	820	34
149	②	張氏妻石氏墓誌	855大中9.2.23	石			女	853大中7.8.5	774	80
150	③	何少直墓誌	855大中9.8	何	少直	子實	男	855大中9.5.4		
151a	③	康叔卿妻傅氏墓誌	856大中10.11.25	康	叔卿		男	826至道2.3.14	782	45
151b	③			傅			女	856大中10.11.25	789	68
152a	③			史	興		男	853大中7.1.29	780	74
152b	④	史興墓誌	857大中11	張			女	845会昌5.8.17	772	64
152c	④			梁			女	848会昌9.5.3	799	57
153	④	曹氏妻鄭氏墓誌	858大中12.11.9	鄭			女	858大中12.5.6	797	62
154	③	何滋墓誌	850大中庚午.11.28	何	滋	處休	男	5.29	70	
155	②	何弘毅墓誌	865咸通6.8	何	弘毅	子肅	男	8.1	60	
156a	③	曹惟政及妻張氏墓誌	865咸通6.11.7	曹	惟政		男	853大中7.9.30	779	75
156b	④			張			女	858大中12.口.25	776	83
157	③	何倫墓誌	866咸通7.11.19	何	倫	太常	男	866咸通7.7.25	801	66
158	③	何遠墓誌	867咸通8.4.4	何	遠	德之	男	867咸通8.3.22	833	35
159	③	何楚榮墓誌	867咸通8.8.18	何	楚榮	楚章	男	865咸通6.10.7	808	58
160	③	曹謙墓誌	871咸通12.5.2	曹	謙	岩退	男	871咸通12.5.4		
161	②	曹弘立墓誌	871咸通12.7.11	曹	弘立	弘立	男	864咸通5.4.1	806	59
162	③	唐氏墓誌	872咸通13.9	唐			男	872咸通13		
163	④	何權故姬王桂芬墓誌	875乾符2.7.6	王	桂華		女	875乾符2.6.6	848	28
164	②	安玄朗墓誌	875乾符2.11.23	安	玄朗	子遠	男	875乾符2.8.23	829	47
165	④	史維洛妻馬氏墓誌	唐	馬			女			38
166a	④	□君及夫人何氏墓誌	唐	□			男			
166b	③			何			女			
167a	③	何叔平夫人劉氏墓誌	唐	何	叔平		男			
167b	④			劉			女			
168	③	曹建達墓誌	唐	曹	建達		男			

(1)『石刻題跋索引』楊殿珣 商務印書館 1940

(2)『北京圖書館藏中國歷代石刻本彙編』第11～35冊 北京圖書館金石編 中州古籍出版社 1989

(3)『唐代墓誌銘彙編附考』第1～18冊 毛漢光撰 台灣中央研究院歷史語言研究所 1984-94

(4)『隋唐書畫錄』上下2冊 河南省文物研究所・河南省洛陽地區文管所編 文物出版社 1984

(5)『唐宋墓誌』遠東學院藏本國錄』香港中文大學中國文化研究所史料叢刊2 饒宗頤編 中文大學出版社 1981

(6)『隋唐五代墓誌彙編』全30冊 天津古籍出版社1991-92

(7)『洛陽出土歷代墓誌輯刊』1冊 洛陽市文物工作隊編 中國社會科學出版社 1991

(8)『唐代墓誌彙編』『唐代墓誌彙編終集』周紹良 上海古籍出版社 1992-2001 統集是「統一〇」と示す

(9)『全唐文』墓誌等編 上海古籍出版社 1990

(10)『全唐文新編』周紹良 吉林文史出版社 1999

(11)『全唐文補遺』陝西省戶籍整理辦公室 吳鋼 三秦出版社 1994-2000

(12)『新中國出土墓誌』陝西(壹・貳)中國文物研究所 陝西省古籍整理辦公室 文物出版社 2000-03  
河南(壹・貳)中國文物研究所 河南省文物考古研究所 文物出版社 1994-2002  
重慶 中國文物研究所 重慶市博物館 文物出版社 2002  
北京(壹) 中國文物研究所 北京石刻藝術博物館 文物出版社 2003

(13)その他 吐魯番『吐魯番出土碑誌集注』上下2卷 侯燮・吳美琳 巴蜀書舍 2003

石文『隋唐五代石刻文獻全編』國家圖書館善本金石組 北京圖書館出版社 2003

固原『固原南郊隋唐墓地』羅豐 寧夏回族自治區固原博物館 文物出版社 1996

勉成『唐史道洛墓』原州聯合考古隊 勉成出版 2000

文物『文物』考文『考古與文物』

〈図表2〉 判定①：ソグドであるもの

整理番号	判断	墓誌銘	葬年	姓	諱	字	性	卒年月日	没年齢	生年	判定の根拠
007	①	康婆墓誌	647貞観21.9.1	康	婆	李大	男	647貞観21.8.14	75	573	康国王之裔
009	①	康阿達墓誌	627-649貞観間	康	阿達		男				康國人
014	①	何盛墓誌	653永徽4.8.23	何	盛	多子	男	653永徽4.7.19	80	574	大夏之後
016	①	安萬通墓誌	655永徽5.12.1	安	萬通	萬通	男		69		西城安息国
017	①	史崇威墓誌	658顯慶3.12	史	崇威	元貞	男	656顯慶1.5.13	78	579	建康飛揚人・固原
019a	①	史道洛墓誌	658顯慶3.12	史	道洛		男	655永徽6.1.28	65	591	固原
028	①	史崇威夫人安娘墓誌	664麟徳1.11.16	安	娘	白	女	661龍朔1.1.12	72	590	安息王之苗裔
034	①	康敬本墓誌	670咸亨1.□.14	康	敬本	延宗			4□		出身康唐 <sup>037</sup> 康武通のおじ
035a	①	史阿耽墓誌	670咸亨1.11.27	史	阿耽	說	男	669總章2.9.23	86	584	史国王之苗裔
036	①	史康神墓誌	671咸亨1.12.13	史	康神	善集	男	666乾封1.8.13	44	623	固原
037a	①	康武通墓誌	672咸亨3.2.22	康	武通	宏達	男	649貞観23.5.19	65	585	034 康敬本の父方の甥
041	①	康元敬墓誌	673咸亨4.5.29	康	元敬	留師	男	673咸亨.5.7	66	608	薩寶
048	①	史道德墓誌	678儀鳳3.11.8	史	道德	萬安	男	678儀鳳3.3.19	66	613	其先建康飛揚人事・固原
049	①	康綾墓誌	679調露1.10.8	康	綾	靜	女	678儀鳳2.12.12	55	624	康國人
056	①	安元壽墓誌	684光宅1.10.24	安	元壽	茂齡	男	683永淳2.8.4	77	607	綿木
059	①	康宜德墓誌	692天授3.4.1	康	宜德	有鄰	男	692天授3.3.17	66	627	西城康唐
064	①	安氏妻康氏墓誌	697万歳通天	康			女	697万歳通天			康国王首領之女 以本國爲
067	①	何□墓誌	700久視1.9.28	何	□□	□□	男	700久視1.9.7	85	614	大夏月氏
071	①	安令節墓誌	705神龍1.3.5	安	令節	令節	男	704長安4.11.23	60	645	出自安息国
074a	①	安善及妻何氏墓誌	709景龍1.10.26	安	善	薩	男	664麟徳1.11.7	64	601	其先安国大首領
100b	①	曹氏妻康氏墓誌	757聖武2.閏8.9	康			女	757聖武2.7.14	71	687	康唐之裔
109a	①	李元光及妻阿史那氏墓誌	794貞元10.11.28	安(李)	元光		男	793貞元9.11.15	67	727	其先安息王之寶也
111	①	石崇俊墓誌	797貞元13.8.19	石	崇俊	考德	男	797貞元13.2.20	81	717	蕃に石国
112	①	米維芬墓誌	805永貞1.12.19	米	維芬	維芬	男	786貞元1.9.21	92	694	其先西城米国人也
132a	①	何文哲墓誌	830太和4.10	何	文哲	子洪	男	830太和4.4.1	67	764	公本何国王丞之五代孫

み与えられた特殊なものであり、則ち薩宝に就任していればソグド人であると考えた。

第三は、血のつながりのある家族が上記の条件によりソグド人であると確定している場合とした。

上記の条件で分類した結果、二五件がソグド人の墓誌であると考えられた。

## ②ソグド人である可能性が高いもの(図表3)合計五九件

直接的な表現ではないが、ソグド人だと推測できるものを、以下三つの基準を設け、②と判定した。

## 第一は、ソグド姓として婚姻関係が結ばれている場合である。<sup>(1)</sup>

ソグド人が聚落を形成していたことから推測できるように、彼らはソグド姓として婚姻を行っていた。これは既にいくつかの墓誌から確認され、報告されており、以下に一例をあげる。固原南郊隋唐墓地は現在の寧夏回族自治区の固原で一九八一年から発掘された墓地群である。ここから「史訶耽墓誌」(035 670 咸亨1.11.27)のように「史国王之苗裔」と名乗る墓誌やシルクロード貿易の様子を伝える「鎏金銀壺」や、「東ローマ金貨」などが出土し、五基の隋唐代の史姓のソグド人の墓陵が確認されている。そのうち、「史索巖墓誌」(017 658 顯慶3.12)の妻「史索巖夫人安娘墓誌」(028 664 麟徳1.11.16)には「安息王之苗裔」と記されており、ソグド姓として婚姻がされていることが分かる。また榮新江氏は墓誌や文献資料から、安史の乱以前はソグド姓としての婚姻が普遍的で、聚落内部で行われていたが、安史の乱以降はソグド姓としての婚姻が急激に減り、漢人との婚姻が明らかに増えたと指摘されて

〈図表3〉 判定②：ソグドである可能性が高いもの

整理番号	判断	墓誌銘	享年	姓	諱	字	性	卒年月日	没年齢	生年	判定の根拠
010a	②	曹諒及妻安氏墓誌	650水微1.7.9	曹	諒	叔子	男	614大業10.7.2			曹-安
010b	②	曹諒及妻安氏墓誌	650水微1.7.9	安			女	650水微1.6.1	86	565	曹-安
011a	②	安延及妻劉氏墓誌	653水微3.2.28	安	延	黃微	男	642貞觀16.7.20	84	559	西郷 玉剛 武威人
018	②	安靜墓誌	657顯慶2.12.19	安	靜	盛冲	男	657顯慶2.11.22	62	596	朔北・蒲海・葱河
019b	②	史道洛墓誌	658顯慶3.12	康			女	646貞觀20.2.12	55	592	固原 史-康
021	②	史隆墓誌	659顯慶4.8.16	史	隆	景	男	633貞觀7.3.27	79	555	050a 安懷夫人史氏の父
022	②	安度墓誌	659顯慶4.11.7	安	度	善通	男	659顯慶4.10	78	582	父名：薩 西城
023	②	康氏妻史氏墓誌	661顯慶6.3.7	史			女	661顯慶6.2.23	36	626	康-史
026a	②	安師墓誌	663龍朔3.9.20	安	師	文則	男	657顯慶2.1.10	57	601	安-康 032 康達とほぼ同文
026b	②	安師墓誌	663龍朔3.9.20	康			女	663龍朔3.8.21	54	610	安-康
029	②	史信墓誌	665麟德2.7.12	史	信	安期	男	665麟德2.6.25	66	600	建康史氏
031	②	曹欽墓誌	667乾封2.11.5	曹	欽	毛良	男	667乾封2.4.10	74	594	金方 史氏の地名
032	②	康達墓誌	669總章2.7.8	康	達	文則	男	669總章2.6.20	62	608	026 安師とほぼ同文
035b	②	史訓乾墓誌	670咸亨1.11.27	康			女	630貞觀4.9.10	20	611	史-康 固原
039	②	史住墓誌	673咸亨4.2.16	史	住		男	673咸亨4.2.16	77	597	西州高昌
045	②	曹氏妻何氏墓誌	674咸亨6.4.6	何			女	674咸亨6.3.25	50	625	曹-何
047	②	康氏妻曹氏墓誌	677儀鳳2.11.26	曹			女	677儀鳳2.1.15	85	593	康-曹
051	②	安神儀墓誌	680調露2.2.28	安	神儀		男	680調露2.10.58	58	623	安-史 武威姑臧
052	②	何摩訶墓誌	680調露2.2.28	何	摩訶	迦	男	680調露2.2.16	51	630	姑臧
053a	②	康欽墓誌	681永隆2.8.6	康	欽	仁德	男	656顯慶1.2.18	65	592	康-曹
053b	②	康欽墓誌	681永隆2.8.6	曹			女	681永隆2.6.1	75	607	康-曹
054	②	康留寶墓誌	682永淳1.10.14	康	留寶		男	682永淳1.7.17			西海
055	②	康摩伽墓誌	682永淳1.	康	摩伽		男	682永淳1.4.3			西海
060a	②	安懷及妻史氏墓誌	693長寿2.8.3	安	懷	道	男	683永淳2.8.12	53	631	安-史 張掖
060b	②	安懷及妻史氏墓誌	693長寿2.8.3	安			女	693長寿2.1.2	64	630	安-史
061a	②	康智墓誌	694長寿3.4.7	康	智	威	男	693長寿2.2.23	71	623	支氏 康-支
063	②	曹氏妻唐氏墓誌	695乾聖1.3.23	康			女				留-康
068a	②	史懷剛墓誌	702長安2.5.30	史	懷剛	中晦	男	662龍朔2.6.10	□		原州・六州
069a	②	史善法及妻康氏墓誌	703長安3.4.18	史	善法	仁仁	男	702長安2.11.3	75	628	史-康
069b	②	史善法及妻康氏墓誌	703長安3.4.18	康			女		63		史-康
070	②	康郎墓誌	703長安3.4.23	康	郎	善慶	男	702長安2.4.29	43	660	西域の地名多し
072	②	康富多妻康氏墓表	705神龍1.10.30	康			女	705神龍1.10.24			康-康
073	②	康志墓誌	705神龍1.11.26	康	哲	哲哲	男	705神龍1.6.4			出身敦煌
074b	②	安善及妻何氏墓誌	709長安3.10.26	何			女	704長安4.1.20	83	622	安-何
076	②	安思簡墓誌	716開元4.5.27	安	思簡		男	716開元4.4.11	58	659	西土一東周
083	②	安元壽妻崔六娘墓誌	727開元15.2.29	崔	六娘	六娘	女	698聖曆1.10.16	89		崔氏 安-崔
084b	②	薛府君及夫人史氏墓誌	728開元16.4	史			女	724開元12.16.4			涼州
089	②	康庭蘭墓誌	740開元28.10.17	康	庭蘭		男	740開元28.9.□	65	676	父名：煩陸
093	②	史思禮墓誌	744天宝3.11.23	史	思禮	伯佳	男	744天宝3.8.20	77	668	武威
097	②	康氏妻崔氏墓誌	749天宝8.8.10	崔			女	749天宝8.6.9	78	672	康-崔
099	②	何德墓誌	754天宝13.10.23	何	德	伏德	男	754天宝13.7.23	71	684	太夫人：酒泉安氏
100a	②	曹氏妻康氏墓誌	757聖武2.閏8.9	曹	嵩		男	756聖武1.8.26	86	671	曹-康
101	②	康君妻康氏墓誌	760乾元3.2.22	康			女	758乾元1.2.25	57	702	康-康 会稽
103	②	曹閔固墓誌	775大曆10.8.6	曹		閔固	男	775大曆10.6.19	47	729	曹-石 成德
105	②	曹惠琳墓誌	779大曆14.4.27	曹	惠琳		男		54		本望微煌唐氏也 107a の血縁
106	②	安文光夫人康氏墓誌	782建中3.4.20	康			女	782建中3.2.22	77	706	安-康 甘肅の地名多し
107	②	曹景林墓誌	782建中3.9	曹	景林		男	782建中3.7.	53	730	105 曹惠琳と血縁関係
118	②	石神福墓誌	813元和8.2.18	石	神福	忠良	男	813元和8.1.17	55	769	成德
121	②	石烈吸墓誌	817元和12.8.24	石	默吸	默吸	男	817元和12.□.13	73	745	石-康
123	②	曹華威墓誌	820元和15.7.9	曹	華威		男	820元和15.1.24	79	742	高平人 140 曹華の父
124	②	康志遠墓誌	821長慶1.5.25	康	志遠	志遠	男	821長慶1.5.10	54	768	康日知
126	②	石忠政墓誌	825宝曆1.8.21	石	忠政	不邪	男	817長慶1.7.10	82		石-何
132b	②	何文哲墓誌	930太和4.11	康			女	797貞元13.6.19	46	752	何-康
140	②	曹慶墓誌	847大中1.7.21	曹	慶	宗禮	男	847會昌6.12.15	49	799	123a の曹華の息子
143a	②	米文翬及妻馬氏墓誌	849大中3.2	米	文翬		男	848大中2.2	55	794	魏博
144	②	安珍墓誌	850大中4.10.5	安	珍		男	850大中4.5.5	84	767	先祖安
148	②	康氏墓誌	853大中7.10	康			男	853大中7.7.19	34	820	康-康
149	②	張氏妻石氏墓誌	855大中9.2.23	石			女	853大中7.8.5	80	774	辺境を示す語 武威
155	②	何弘敬墓誌	865咸通6.8	何	弘敬	子蕭	男	8.1	60		何-安 魏博
161	②	曹弘立墓誌	871咸通12.7.11	曹	弘立	弘立	男	864咸通5.4.1	59	806	曹-石
164	②	安玄朗墓誌	875乾符2.11.23	安	玄朗	子遠	男	875乾符2.8.23	47	829	其先祖威人也 曹祖善

(14) 森部豊氏は沙陀王朝下のソグド人の夫妻の墓誌を取り上げ、ソグド姓どうしの婚姻が後晋まで続いていたことを確認されている。ここから、ソグドどうしの婚姻は、時代によって増減があったものの、唐以前から、後晋までは続いていた事がわかる。

第二は、名前がソグド語で解読されていることである。先述したように、薩宝が中世イラン語の東方言に分類される、ソグド語の *stripw* の漢字音写であることと同様に、その名前にもソグド語の要素が認められるのである。例えば、安史の乱の首謀である安祿山はその姓から安国出身のソグド人の子孫であるとされるが、祿山の当時の発音は *lukkan* であり、ソグド語の *roks(a)n* 「明るい」を音写したものと考えられている。(16) 池田温氏は、敦煌文書の差科簿にあるソグド聚落「從化郷」を分析し、「二三人の人名を胡風名・漢風名・孰れとも判断しがたいという三つのグループに分類して、ソグド語名から漢風名への世代間での変化を分析された。(17) これら池田温氏、吉田豊氏などの研究をもとに、墓主や先祖の名前がソグド語で解読されているものを②と判定した。例えば、「安懷及妻史氏墓誌」(063長壽283)の夫人史氏の父の名の「盤陞」は、中古音では *bunda* であり、吉田豊氏は、「僕」の意であるとする。(18) また、固原南郊隋唐墓出土の「史射勿墓誌」の墓主は、諱が射勿字は槃陀である。吉田豊氏によると、「射勿」(\**džia niue*) はソグド語の第一一の月の女神 *jymtyc* に由来するソグド人名 *jymt* と同様であるとされるので、諱と字を合わせた「射勿槃陀」は、「女神 *jymtyc* の僕」の意味であると考えられる。

第三は、ソグドと関係が深い地名があるものを、②と判定した。

例えばソグド聚落の確認されている敦煌や、交易活動が盛んに行われた武威・姑臧・酒泉など河西の地名や、多くのソグド系武人がいたことが確認されている廬龍・成徳・魏博の藩鎮名であり、また地名として顕著に記されていないにしても、「崑崙山」や「玉関」などの地名や、五行で西を指す「金方」など西域を暗示する言葉が明らかに多くある場合である。

③ソグドであるかは不明なもの

上記の①②に該当せず、またソグド人でないと考えられるものを③と判定した。例えば、「石暎墓誌」(08074開元11)には「晋の將軍苞の慶育にして、衛の純臣碯の禮苗なり。」と記されている。後述するが、春秋石碯・苞の裔は渤海の石氏の裔であるとされており、また、墓誌には上記の①や②の条件に該当するような表現はない。③は合計七一件であった。

④ソグド姓を配偶者に持つ非ソグド姓

今回収集した墓誌で、墓主はソグド姓と婚姻関係をもつが、非ソグド姓である場合を④と判定した。このようなケースは、夫が漢人姓、妻がソグド姓の例もあり、またその逆も見られ、埋葬地などからソグド姓の配偶者がソグド人である可能性は捨てきれないものの、それ以上明確にはつかみにくいケースである。④に該当するものは合計四八件であった。

### 三、判定・分類の結果

上記の条件で分類した結果は、①二五件、②五九件、③七一件であった(図表4)。この①②③の墓誌数を生年代ごとに分類し、グ

ラフにしたものが〈図表5〉である。このグラフから時代がくだるごとに①と②の割合が減っていることがよくわかる。①②のようなソグド人であると考えられる人々が、積極的にソグディアナ地方出身であることを墓誌に記さなくなっていることが分かる。

### 第三節 ソグド姓とソグド人墓誌

ソグド姓は出身聚落の名に由来するものであるという一方で、上記の七姓を名乗る者がそのまますべてソグド人ではなく、漢人や非漢人にもこれらの姓を名乗る者がいた。

桑原隲藏氏は論文「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」<sup>(23)</sup>で、西域出身と見られる人物を個別検証するにあたって、姓を分析された。本稿の対象であるソグド七姓について、以下のような見解が示されている。安・康・米の三姓に関しては『新唐書』『元和姓纂』などを用い、詳細に考察され、それぞれ「安姓は大体に於て西域の胡人、若くはその裔と認めて差し支えない。」<sup>(24)</sup>「この(隋唐)時代に現はれる康姓は、殆ど外国人に限る。たとひ支那人に康姓があっても、それは当時頗る微弱に相違ない。」<sup>(25)</sup>「米姓は唐の中世から始めて支那の記録中に現はれて来て、それは西域の胡人に限った。」<sup>(26)</sup>と記すように、この三姓を有す場合には、おおむねソグド人であるということである。

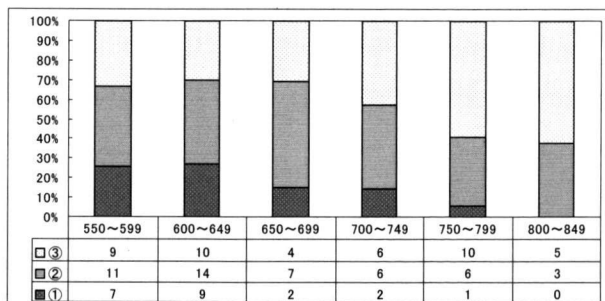
残る石・曹・史の三姓に関しては、「石・曹・史の姓は、古く支那人の間にも存在し、又石・史の姓は、塞北諸族出身者の間にも存在する。単に石姓・曹姓・史姓の故を以て、その人を西域出身と速断出来ぬこと申す迄もない。」と記し、残る何姓に関しては、特に

〈図表4〉 ソグド七姓の判定

	安	康	米	石	曹	史	何	計
①	6	9	1	1	0	5	3	25
②	10	19	1	4	11	9	5	59
③	2	7	1	3	18	18	22	71
計	18	35	3	8	29	32	30	155

言及していない。「記録の上に西域胡人たることが明記されてあるか、然らずとも四周の事情から、その人の西域出身たることが略推測される場合の外は、軽々しい断定をさねねばならぬ。」<sup>(27)</sup>とした。桑原氏の指摘の一方で、現在のソグド研究において、ソグド姓を有す者を無批判にソグド人として扱う傾向が全く見られない訳ではない。以下では、安・康・米の三姓に関しては、上記のソグド墓誌の分類結果を本とした考察を記し、石・史・何・曹の四姓に関して

〈図表5〉 ソグド七姓による判定①②③の年代比(生年による)



は、墓誌の分類結果を考慮しつつ、改めてそれぞれの姓について検証することとする。

# 一、安（涼州武威姑臧の安氏 安氏墓誌一八件中五件）

収集した墓誌中で、安姓を有するものは、全部で一八件あり、ほぼソグド人として扱える①②の合計は一六件で全体の約八九％であり、この数値からも、唐代に安姓を持つ者はほぼソグド人であると言えるであろう。

安姓は『新唐書』卷七五下、宰相世系表五下、李氏、武威李氏の条によると、以下の記載のみである。

武威李氏、本安氏、出自姬姓。黄帝生昌意、昌意次子安、居于西方、自号安息国。後漢末、遣子世高入朝、因居洛陽。晋・魏間、家于安定、後徙遼左、以避乱又徙武威。後魏有難陀孫婆羅周・隋間、居涼州武威為薩宝。生興貴・修仁。至抱玉賜姓李。

涼州武威姑臧の李氏ははもとと安姓であり、彼らはそもそも西方の安息国に居住し、北周、隋間に武威に居住し、北周・隋では涼州武威で薩宝を務めた。唐代に入ると、安興貴・修仁兄弟は、隋末唐初の群雄である李軌を六一九（武徳三年）に滅ぼす際に活躍し、また安祿山の乱で南陽を守った功により、李姓を賜った抱玉を輩出している。この一家は西域から遷ってきた人々であるとともに、ソグド聚落を取り仕切っていた薩宝の位にも就任していることから、ソグド人であったと考えられる。収集した墓誌の中には、安興貴の息子であり、やはり姑臧を本貫とする「安三元壽墓誌」（056 69 光宅1・10・24）が含まれており、冒頭から世系は、以下のように記され

ている。

蓋天分景宿、文昌垂列將之名、地括羣流、師貞建丈人之號。故降周啓統、掌兵屬於司武、炎劉御歷、制衆在于將軍。然則簡材以任爪牙、選士而爲心膂。稽之舊典、代有其人。君諱元壽、字茂齡、涼州姑臧人也。川橫玉塞、人多剛悍之風、地枕金方、俗負堅貞之氣。關西騎士、武賢之代習兵符、隴右良家、充國之門傳劍術。曾祖弼、周朝服侯。幼挺人英、夙標時望。丹山絳羽、響振朝陽、紫闕騰鱗、光流下稷。祖羅、周開府儀同三司、隋石州刺史、貴鄉縣開國公。質表珪璋、器惟瑚璉。衣冠佐夏、道叶調梅。鍾鼎遷周、化□分竹。父興貴、皇朝右驍衛將軍、左武衛將軍、冠軍將軍、上柱國、涼公、別食綿、歸二州、實封六百戶。克施在封六百戶、克施在操、匪躬成節。以功詔爵、爰頒錫壤之榮、以德命官、載啓銜珠之秩。

蓋し天景宿を分け、文昌列將の名を垂れ、地群流を括り、師貞丈人の号を建つ。故に降周統を啓き、兵を掌りて司武に属し、炎劉歴を御し、衆を制して將軍に在り。然らば則ち材を簡びて以て爪牙を任じ、士を選びて心膂を爲す。之を旧典に稽え、代々其の人有り。君、諱は元壽、字は茂齡、涼州姑臧の人なり。川は玉塞に横たえ、人は剛悍の風多く、地は金方に枕み、俗は堅貞の氣を負う。關西の騎士、武賢の代に兵符を習い、隴右の良家、充國の門に劍術を伝う。曾祖の弼、周朝の侯を服す。幼くして人英に挺で、夙に時望を標す。丹山羽を絳し、朝陽に響振し、紫闕鱗を騰げ、下稷に光流す。祖の羅、周の開府儀同三

〈図表 6〉 涼州武威姑臧

		墓誌銘	葬年	姓	諱	字	性	武威・姑臧
009	①	康阿達墓誌	627-649 貞觀間	康	阿達		男	詔贈武威太守
011a	②	安延及妻劉氏墓誌	653 永徽 4. 3. 28	安	延	資薩	男	河西武威人也
051	②	安神儀墓誌	680 調露 2. 2. 28	安	神儀		男	驛跡姑臧
052	②	何摩訶阿羅誌	680 調露 2. 2.	何	摩訶	迦	男	因官遂居姑臧太平之鄉
056	①	安元壽墓誌	684 光宅 1. 10. 24	安	元壽	茂齡	男	涼州姑臧之人
071	①	安令節墓誌	705 神龍 3. 5	安	令節	令節	男	先武威姑臧人
077	④	史氏妻契苾墓誌	721 開元 9. 2. 25	契苾			女	今為涼州姑臧人也
083	②	安元壽妻翟六娘墓誌	727 開元 15. 2. 29	翟	六娘	六娘	女	安元壽の妻 武威安公……夫人翟氏
093	②	史思禮墓誌	744 天寶 3. 11. 23	史	思禮	伯珪	男	武威人也
149	②	張氏妻石氏墓誌	855 大中 9. 2. 23	石			女	清河郡張府君夫人武威郡石氏
155	②	何弘敬墓誌	865 咸通 6. 8	何	弘敬	子肅	男	公娶武威安氏
161	②	曹弘立墓誌	871 成通 12. 7. 11	曹	弘立	弘立	男	夫人武威石氏
164	②	安玄朗墓誌	875 乾符 2. 11. 23	安	玄朗	子遠	男	其先武威人也

〈図表 7〉 会稽

		墓誌銘	葬年	姓	諱	字	性	会稽
021	②	史陟墓誌	659 顯慶 4. 8. 16	史	陟	景	男	□□會稽人□
101	②	康君妻康氏墓誌	760 乾元 3. 2. 22	康			女	会稽人也
106	②	安文光夫人康氏墓誌	782 建中 3. 4. 20	康			女	其先会稽人也
124	②	康志遠墓誌	821 長慶 1. 5. 25	康	志遠	志遠	男	本会稽人也
132a	①	何文哲墓誌	830 太和 4. 10	何	文哲	子洪	男	夫人從公之爵，封於會稽，爲郡夫人焉
162	③	康氏墓誌	872 咸通 13. 9	康			男	会稽人

司、隋の石州刺史、貴郷縣開國公なり。質は珪璋を表し、器は瑚璉を惟う。衣冠は夏を佐け、道は調梅に叶う。鍾鼎は周に遷り、化は分竹を□。父の興貴、皇朝の右驍衛將軍・左武衛將軍・冠軍將軍・上柱國・涼公、別に綿・歸二州を食み、実封は六百戸たり。克く施すに封六百戸に在り、克く施すに操在り、匪躬して節を成す。功を以て爵を詔され、爰に錫壤の榮を頒け、徳を以て官に命ぜられ、載ち銜珠の秩を啓く。

この墓誌の世系の部分には、ソグドであるという直接的表現はないが、武威姑臧のソグド人の代表とも言える安元壽の一族の勇壮なさまが記されている。

武威姑臧は、『後漢書』卷三一、孔奮伝によれば、後漢の時代にはすでに日に四度も市が立つほどであり、いわばシルクロードの中国側の港として発達しており、薩宝が設置されていたことからソグド聚落が形成されていた場所と考えられている。『新唐書』や『元和姓纂』には、武威には安氏以外のソグド姓の記載はないが、唐代墓誌中に「武威」「姑臧」が官職名・本貫・祖先の出身などで記されているものは、安氏に限られてはおらず、安・康・史・石の四姓の計十三件が確認できる。このことによって、漢代から隊商貿易で繁栄した涼州武威姑臧が、唐代を通じてソグド人たちの拠り所となっていたことが確認できる（図表 6）。

## 二、康（会稽）<sup>(32)</sup> 康氏墓誌三五件中四件 後期に限定

ソグド姓墓誌中における、康氏の墓誌は全部で三五件あり、約八五％が①②のいずれかに分類された。墓誌から見ても、康姓も安姓

と同様に、唐代において康を姓に持つ者は、ほぼソグド人であると言えるであろう。

〔図表7〕は、ソグド姓墓誌中で「会稽」と記されたものである。ここからソグド人と会稽は何らかの関係を持っていることがうかがわれる。会稽と関係を持つソグド姓墓誌全六件中、康氏は四件と半数以上を占めている。また康氏墓誌の全三十五件中では四件ではあるものの、この四件は安史の乱の発生の七十五年以後に限定されている。会稽というと、第一に現在の浙江省会稽を考えるが、宋新江氏は、『晋書』地理志、涼州の条、『通典』瓜州の記載を根拠として、会稽は唐代の瓜州にあるとされ、会稽出身とする康氏は安史の乱以降に現れ、安史の乱以前は常楽を本貫としていたとされた。

会稽が記されている康氏の墓誌のうち三墓誌は配偶者がソグド姓であることや、墓誌に甘肅方面の地名が多くあることから、ソグド色が強いと考えられる。しかしながら、安史の乱以前の康氏墓誌には「常楽」や常楽県の所属する「瓜州」と記されたものが無いことには疑問が残る。

### 三、米<sup>(35)</sup>

本研究で、収集した米氏の墓誌は三件と少数ではあったが、桑原氏が言うように、<sup>(36)</sup>三件とも埋葬されたのが八〇五年、八四六年、八四九年と唐の後期に限られており、「米継芬墓誌」(一二・865 永貞1・12・19)には「其先西域米国人也」とはっきりとソグド人であるということが記されており、また、「米文辯及妻馬氏墓誌」(一四・389 大中3・88)はソグド人が多く存在していた魏博節度使下にいた

ことから、ソグド人である可能性が高い。史書・墓誌の情報を総合すると、唐代の米氏が、即ち米国出身者であるという可能性は、高いと考えられる。

### 四、石

ソグド姓墓誌中の石氏の墓誌は、全八件と米氏に次いで少なく、その内訳は①一件、②四件、③三件となり、①②の合計は半数を超える。

『元和姓纂』巻一〇に石氏の記載はあるものの、西域人の石氏の記載はなく、まとめると次のような記載があるのみである。

衛大夫石碣之後。……周石速。漢石商・石奮。奮生建・慶、号

「万石君」。

【渤海】奮裔孫苞……

【平原】厭次人、奮後……

【上黨】晋石勒、上党武鄉羯胡也……

【河南】後魏官氏志、烏石蘭氏改姓石……<sup>(37)</sup>

この記載によると、石氏は三つの系統から成っている。第一は衛大夫石碣・漢の石奮を祖とする渤海・平原の石氏、第二は羯族の石勒を祖とする上党の石氏、第三は烏石蘭氏が改姓した河南の石氏である。『新唐書』石洪<sup>(38)</sup>伝には、石洪はもともと烏石蘭という姓であったという記載があるが、烏石蘭という姓をもつ人がどのような人々であったのかということは、このほかにほとんど記載がないためによくわかっていない。しかしながら、その姓が複姓であることから漢人ではないと考えられている。



以上のように『元和姓纂』には西域人の石氏は記されていない。

また『新唐書』宰相世系には石氏の記載そのものが見えない。しかし『新唐書』卷一九三、忠義伝下、石演芬の条の冒頭には「石演芬者、本西域胡人」とあり、石演芬は西域出身であると分かることから、唐代の石姓に石国出身者が存在していたことが推測できる。ちなみに、南宋に記された『古今姓氏書辯證』になると、卷三九、石氏の条に「唐西域石国王姓石」と記されるようになっていく。

また、姚微元氏の『北朝胡姓考』には烏石蘭・羯胡・石国の石氏が記載されており、非漢族の石氏の構成としては、『元和姓纂』『古今姓氏書辯證』の記載と一致している。<sup>(40)</sup>

③に分類された三件中の『石暎墓誌』(〔082〕724開元11.11)と『石倚墓誌』(〔090〕開元攝提格十月)はそれぞれ、その祖を春秋石碯・苞の裔とする、或いは直接「渤海」という語を記しており、上記『元和姓纂』で記されていた渤海の石氏であると考えられる。墓誌中には烏石蘭・羯胡の石氏は見られなかった。

## 五、史

史氏の記載は、『新唐書』<sup>(41)</sup>よりも『元和姓纂』の方がより詳細である。『元和姓纂』巻六の史氏の記載を略記すると、次のようになる。

周太史史佚之後……

【建康史氏】今隸酒泉郡、史丹裔孫後漢楊賜侯苞之後……

【宣城】丹孫均、均子崇、自杜陵受封潁陽侯、遂為郡人。崇裔

孫宋樂鄉令瓊……

【高密】史丹之後、有史曇。曇曾孫節、唐礼部侍郎。

【京兆】丹裔孫瓚、留長安……

【陳留考城】今隸曹州。……今無聞。<sup>(42)</sup>

【河南】本姓阿史那、突厥科羅次汗子……

建康の史氏は史丹をその先としているが、森部豊氏によって、西域から酒泉の建康に内附し、その後、二系統に分かれた史氏が存在したことが明らかにされている。<sup>(43)</sup> 固原南郊隋唐墓群から出土した『史索巖墓誌』(〔017〕658顯慶3.12)の「公諱索巖、字元貞、建康飛橋人也」という記載と、『旧唐書』卷一八一、史憲誠伝には「史憲誠、其先出於奚廩、今為靈武建康人」という記載がある。史索巖は固原のソグド人であり、史憲誠の出身は奚族とソグド人との二つの説があるとされ、靈武で建康の史氏と何らかの関係を持ったので、建康の史氏であると名乗ったと考えられている。このように、『元和姓纂』の建康の史氏には、固原と靈武の二カ所に分かれたと考えられるソグド人が含まれている可能性が高いと考えられる。

固原の「史道徳墓誌」(〔048〕678儀鳳3.11)冒頭部分に次のような記載がある。

公諱道徳、字萬安、其先建康飛橋人事。原夫金方列界、控絶地之長城、玉斗分墟、抗垂天之大昴。稜威邊鄙、挺秀河湟、盟會蕃酋、西窮月竊之野、疏瀾太史、東朝日域之溟。於是族茂中原、名流函夏。正辭直道、史魚譽譔於衛朝、補闕拾遺、史丹翼亮於漢代。龍光迭襲、龜劍聯華、綿慶綿基、斯之謂矣。遠祖因宦來徙平高、其後子孫家焉、故今為縣人也。

公、諱は道德、字は万安、其の先は建康飛橋の人事なり。原より夫れ金方は界を列し、絶地の長城を控え、玉斗は墟を分かち、垂天の大昂に抗たる。辺鄙に稜威し、河湟に挺秀す。蕃酋に盟会し、西のかた月露の野を窮め、太史に疏瀾して、東のかた日域の溟に朝ぐ。是に於て族は中原に茂り、名は函夏に流す。辞を正し道を直くし、史魚衛朝に謇諤し、闕を補ひ遺ちたるを拾い、史丹漢代に翼亮す。龍光は迭襲し、龜劍華を聯ぬ。綿慶の締基たること、斯れ之の謂いなり。遠祖宦に困りて来たりて平高に徙り、其の後、子孫焉に家し、故に今県人と為るなり。

建康の人であることを明記しつつも、衛の史魚、漢の史丹という皇帝に体を張って直訴した同姓の名臣をあたかも同族であるかのように記している。固原の史氏墓誌の中でも、このような記載は、「史道德墓誌」だけで、これは、『元和姓纂』に記されたような、「建康の史氏は史丹の後裔」であるということを、彼らが、七世紀後半には認識していたことを示すものである。

また、河南の史氏はもとは突厥の阿史那氏が、史の文字を残して史氏と名乗ったものであるとされている。その他の、宣城・高密・京兆の史氏は、建康の史氏と同様に、皆史丹を祖としている点で共通している。

#### 六、何（廬江の何氏 何氏墓誌全三〇件＋④六件＝三六件中一件）

収集した何氏墓誌は、全部で三〇件であり、ソグド人であろうと考えられる①と②との合計は全体の約一七％を占めるばかりで、他

の六姓の中で最も少ない。

何氏の記載は『新唐書』にはないが、『元和姓纂』巻五、何氏の条には、

周成王弟唐叔虞、裔孫韓王安、為秦所滅、子孫分散、江淮間音以韓為何、遂為何氏。

とあり、何氏は周の成王の弟唐叔虞を祖先に持ち、江淮間の訛音によって、「何」と称したとされている。この記載は、ほぼこのまま『古今姓氏書辨證』『姓氏急就篇』に引き継がれている。また、『魏書』巻一一三、官氏志には、

賀拔氏、後改為何氏。

とある。北魏期には高車族とされる賀拔氏が何氏と改姓していたというのである。これ以外に詳しい記載はなく、また賀拔氏から何氏へ改姓した具体的な人物についても伝えてはいない。ただし、北魏以降にも、賀拔姓を名乗る人が史書に出てくることから、高車族の賀拔氏すべてが改姓したのではないことだけは確かである。さらに、この記載は『新唐書』にも『元和姓纂』にも採録されていないことから、唐代に高車族の賀拔氏で、何姓を名乗っていた人々は、極めて少数ではないかと考えられる。

以上から、一つは周の成王の弟唐叔虞の裔、もう一つは極めて少数ながらも高車族の賀拔氏の改姓した何氏が唐代にいたこととなる。

何氏墓誌全三〇件と何氏と婚姻関係をもつ六件を合計した三六件のうち一一件、約三〇％に「廬江」という地名が記されている（図表8）。

「何弘敬墓誌」(155) 865 咸通 6 8) には次のような記載がある。

公諱弘敬、字子肅、廬江人也。周唐叔虞之後、十代孫萬食葉於韓、封為韓氏。至韓王安、為秦所滅、子孫流散。吳音輕淺、呼韓為何、因以為氏。漢時比干於公為始祖。比干生嘉、為廬江郡長史、罷居潯縣南鄉福貴里、遂以廬江為郡望。至公九代祖安、仕隋為國子祭酒、襄城公。文德輝赫、冠絕當時。厥後因称襄城公房。又六代祖令思、忠勇邁世、武芸絕倫。以中郎將統飛騎、破薛延陀於石□城、与將軍喬叔望執失思力爭功、為叔望所誣、奏并部曲八百人、遷於魏相貝三州。功名震曜、代濟其美。繇是公家于魏。曾祖俊、贈左散騎常侍、生太保諱默、太保生太師諱進滔。公太師之嗣也。<sup>(46)</sup>

公、諱は弘敬、字は子肅、廬江の人なり。周の唐叔虞の後、十代の孫の万は葉を韓に食し、封ぜられて韓氏となる。韓王安に至りて、秦の滅ぼす所となり、子孫流散す。吳音輕淺なれば、韓を呼びて何と為し、因りて以て氏と為す。漢の時、比干公に始祖たり。比干は嘉を生み、廬江郡長史となるも、罷めて潯縣南郷福貴里に居し、遂に廬江を以て郡望と為す。公の九代祖の安に至りて、隋に仕え國子祭酒・襄城公と為る。文德は輝赫し、當時に冠絶たり。厥の後、因りて襄城公の房と称す。又た六代祖の令思、忠勇邁世にして、武芸絶倫たり。中郎將を以て飛騎を統べ、薛延陀を石□城に破るも、將軍の喬叔望・執失思力と功を争ひ、叔望の誣奏する所と為り、部曲八百人を并せて、魏・相・貝三州に遷る。功名は震曜し、代々其の美を濟す。是

に繇りて公は魏に家す。曾祖の俊は、左散騎常侍を贈られ、太保、諱は默を生み、太保は太師、諱は進滔を生む。公は太師の嗣なり。

この記載をまとめると、「何弘敬は、廬江の人であり、唐叔虞の裔である。その十代孫の萬は韓に封じられたが、安の時に秦に滅ぼされ、その子孫は離散した。吳の訛音によって、韓は何と呼ばれるようになり、それを姓とした。漢の時の比干を始祖として、嘉の時に廬江に住むようになり、九代祖の安、六代祖の令思、曾祖の俊、祖の太保、父の進滔と続き、弘敬へと至っている。」ということである。

何弘敬の父何進滔は『旧唐書』卷一八一に立伝されており、そこには「靈武人也」とあり靈武すなわち靈州出身と

〈図表 8〉 廬江

		墓誌銘	葬年	姓	諱	字	性	廬江	世系
091	③	何簡墓誌	742 天宝 1. 7. 30	何	簡	弘操	男	廬江人也	
099	②	何德墓誌	754 天宝 13. 10. 23	何	德	伏德	男	廬江僧人也	……受姓於韓
115	③	何載墓誌	809 元和 4. 11	何	載		男	廬江郡	周成王母弟唐叔虞後
128	③	何允墓誌	827 太和 1. 5	何	允		男	其先廬州人	
132a	①	何文哲墓誌	830 大和 4. 10	何	文哲	子洪	男	廬江郡開國公	
136	③	陸氏妻何氏墓誌	845 會昌 5. 9. 26	何			女	其先廬江人	
142	③	契苾公妻何氏墓誌	847 大中 1. 10. 2	何			女	望在廬江郡	
154	③	何湛墓誌	850 大中庚午. 11. 28	何	湛	處休	男	廬江郡開國公	
155	②	何弘敬墓誌	865 咸通 6. 8	何	弘敬	子肅	男	廬江人也	周唐叔虞之後
158	③	何遂墓誌	867 咸通 8. 4. 4	何	遂	德之	男	其先廬江人也	
163	④	何禮故姬王桂花墓誌	875 乾符 2. 7. 6	王	桂華		女	廬江	

されている。靈州は隋唐時代に多くのソグド人たちが本貫としていたことが羅豊氏によって指摘されており、<sup>(47)</sup>靈州は東突厥の滅亡後、それまで突厥内に存在したソグド人が内徙した六胡州と北接する、唐の北方辺境地域の最重要拠点の一つである。靈武出身の何進滔の息子であり、なおかつ魏博節度使であった何弘敬の墓誌ではその本貫が「廬江の人なり」と記され、「周の唐叔虞の後」であるとし、さらに「元和姓纂」の何氏の記載とはほぼ同様に、「韓」という音が「何」に転訛したとの記載が続いている。この墓誌は森部豊氏の論考に詳しい。<sup>(48)</sup>森部氏は、「隋代の儒学者の」何妥以前は仮託であり、何令思については何弘敬の直接の祖であったと考える」としている。また、廬兆蔭氏もまた「志文所謂『廬江人也、周唐叔虞之後』等語、顯系出于偽託、不足為据」と記している。<sup>(49)</sup>

つまり、唐叔虞の後裔となるために、つじつまをあわせて「廬江の人」と墓誌に記していると考えられているのである。祖が氏族系譜に記されているような名望家であったり、本貫がその名望家の子孫がいるとされる場所であるときには、どちらかがその記載に連動させられている可能性があり、墓誌の記載をそのまま信用するのは大変危険であろう。

廬江という地名は『元和郡県図志』『読志方輿紀要』ともに一つに限定でき、廬州廬江県を指すと考えられる。また、上述したように「元和姓纂」「古今姓氏書辯證」などによると、何氏は「江淮間に唐叔虞の裔がある」とされている。(図表8)によると、廬江何氏の墓誌一件中三件に「唐叔虞」「韓に於いて姓を受ける」などの記載が見られる。さらに内二件は②である。ここから、唐の中盤、

七五四年にはソグド人の何姓の中に廬江を本貫と称する者があり、特に唐叔虞の裔とするという現象が見られる。

#### 七. 曹(譙)の曹氏 曹氏墓誌全一九件+④一四件+四三件中一四件

曹氏の墓誌全一九件中、①に分類されるような曹国出身であることを明示したものは無く、婚姻・血縁関係から②のソグド人である可能性が高いものに分類される。

曹氏の記載は『新唐書』<sup>(50)</sup>と『元和姓纂』とではほぼ同様であり、共に西域出身の曹氏の記載はない。『元和姓纂』巻五、曹の条には以下のとおり記載されている。

顓頊元孫陸終第五子安為曹氏。至曹挾、周武王封之於邾、為楚所滅、遂復曹氏。周文王第十三子振鐸、封曹、亦為曹氏。因宋所滅、子孫以為氏。

すなわち、顓頊の元孫陸終を祖としており、その後の周の武王に邾に封じられた曹挾の子孫と、周の文王の第十三子で曹に封じられた振鐸の子孫が曹を姓としていたとされる。

また『古今姓氏書辯證』の曹氏の唐代の欄は、『新唐書』の記載を受けて、さらに詳細に記されており、それらを整理してみれば、<sup>(51)</sup>つぎのとおりである。

【譙国】漢丞相平陽侯 曹參

【金鄉】唐御史中丞 曹懷舜

【齊郡亭山県】唐金部郎中長史

【東海】晋吏部尚書 曹簡

【陳留】晋陳留太守 曹同

〈図表 9〉 譙

		墓誌銘	葬年	姓	諱	字	性	譙	祖
033a	③	曹徳及妻淳于氏墓誌	669 総章 2. 8. 26	曹	徳	建徳	男	譙人也	曹苗
042	③	曹澄墓誌	673 咸亨 4. 8. 14	曹	澄	景微	男	沛國譙人也	曹參
047	②	康氏妻曹氏墓誌	677 儀鳳 2. 11. 26	曹			女	沛郡譙人也	曹參
066a	③	曹玄機及妻陳氏墓誌	697 神功 1. 10. 22	曹	玄機	警	男	沛國譙人也	
081	③	曹氏墓誌	723 開元 11. 11. 23	曹	明照		女	譙郡君	金河貴族
098a	④	焦禮及妻曹氏墓誌	751 天寶 10. 3. 1	焦	禮		男	夫人譙郡曹氏	
107	②	曹景林墓誌	782 建中 3. 9	曹	景林		男	譙郡開國公	
125	③	王氏妻曹氏墓誌	824 長慶 4. 11. 25	曹			女	夫人譙郡曹氏	魏公廿七葉之苗裔
140	②	曹慶墓誌	847 大中 1. 7. 21	曹	慶	宗禮	男	譙郡曹府君	父：珠 <sup>[123]</sup> 高平之人
147	④	曹氏妻張氏墓誌	852 大中 6. 9. 10					譙郡曹氏之室	
153	④	曹氏妻鄭氏墓誌	858 大中 12. 11. 9	鄭			女	譙郡府君諱義	
156a	③	曹惟政及妻張氏墓誌	865 咸通 6. 11. 7	曹	惟政		男	公先亳州譙郡人也	
160	③	曹謙墓誌	871 咸通 12. 5. 2	曹	謙	岩退	男	宋州譙郡人也	
161	②	曹弘立墓誌	871 咸通 12. 7. 11	曹	弘立	弘立	男	族望譙郡人也	漢相之裔

【清河】晋清河太守 曹泓

【鉅鹿】魏太尉 曹洪

この『古今姓氏書辯證』の記載によれば、唐代の曹氏は、河南のほかに、沛国譙県・金郷・齊郡亭山県・東海・陳留・清河・鉅鹿に見られ、それぞれ、曹参・曹懷舜・唐金部郎中長史（名は記されていない）・曹簡・曹同・曹弘・曹洪を祖としているという。ここでは、西域のソグド人やソグド人以外の非漢人が、曹姓を名乗ったという形跡は見られない。

曹氏を墓主とする墓誌二十九件と、曹氏を配偶者に持つ④に判定される墓誌とを合計した四三件中、実に約三二％にあたる一四件の墓誌に「譙」という地名が記されている（図表 9）。

『元和郡県図志』『読志方輿紀要』によると、譙なる地は数件存在する。そのうち沛国譙、沛郡譙と記される場合は、亳州譙郡の地を指すと考えられる。また、宋州譙郡については、『元和郡県図志』『読志方輿紀要』ともに記載がないが、五八三（隋開皇三）年に宋州小黄県が亳州に属し、その後、譙県と改称されたこと（『元和郡県図志』卷第七河南道三）から、やはりこちらも同地を指すと考えられる。また、先述したように「古今姓氏書辯證」によると、「譙」つまり「沛国譙」に曹氏が存在しており、彼らは漢の丞相平陽侯である曹参を祖とし、唐代には御史中丞の曹懷舜を輩出しているとされる。（図表 9）によると曹参に関係すると考えられる記載は [042] [047] [161] に確認でき、また、[083] には「古今姓氏書辯證」では「沛国譙」の系統とはされていない曹苗の名前を確認できる。

〈図表 10〉 名望家

		墓誌銘	葬年	姓	諱	字	性	名望家
010a	②	曹敏及妻安氏墓誌	650 永徽 1. 7. 9	曹	諒	叔子	男	曹祐
027	③	何剛墓誌	664 麟德 1. 2. 24	何	剛	伯壽	男	顯頊・周文
029	②	史信墓誌	665 麟德 2. 7. 12	史	信	安期	男	史震・史暉
031	②	曹欽墓誌	667 乾封 2. 11. 5	曹	欽	毛良	男	陸終
033a	③	曹德及妻淳于氏墓誌	669 乾寧 2. 8. 26	曹	德	建德	男	曹苗
041	①	康元敬墓誌	673 咸亨 4. 5. 29	康	元敬	留師	男	畢萬
042	③	曹澄墓誌	673 咸亨 4. 8. 14	曹	澄	景澈	男	振華
047	②	康氏妻曹氏墓誌	677 儀鳳 2. 11. 26	曹			女	曹參
048	①	史道德墓誌	678 儀鳳 3. 11. 8	史	道德	萬安	男	史魚・史丹
050a	③	曹官墓誌	679 調露 1. 10. 13	曹	官	節進	男	曹參
061a	②	康智墓誌	694 長壽 3. 4. 7	康	智	感	男	康叔
082	③	石映墓誌	724 開元 12. 4.	石	映	先進	男	石確・苞
093	②	史思禮墓誌	744 天寶 3. 11. 23	史	思禮	伯達	男	史丹
099	②	何德墓誌	754 天寶 13. 10. 23	何	德	伏德	男	受姓於韓
102	③	康暉墓誌	765 永泰 1. 6. 21	康	暉	懷智	男	康叔
113	③	曹乂墓誌	807 元和 2. 10. 19	曹	乂	元意	男	唐叔虞
115	③	何載墓誌	809 元和 4. 11	何	載		男	唐叔虞
138	③	張銘妻史氏墓誌	847 大中 1. 4	史			女	史丹
155	②	何弘敬墓誌	865 咸通 6. 8	何	弘敬	子獻	男	唐叔虞
157	③	何俊墓誌	866 咸通 7. 11. 19	何	俊	太常	男	唐叔虞
158	③	何達墓誌	867 咸通 8. 4. 4	何	達	德之	男	周武王

「康氏妻曹氏墓誌」(047 儀鳳 2. 11.) は、ソグド姓同士の婚姻であるためにソグド人である可能性が高い②に分類されるが、そこには、

夫人曹氏者、沛郡譙人也。漢相曹參之後、寔當塗之苗胤。と刻され、譙を本貫とし、曹参を祖先とする記載がある。

「譙」と記された一四件の墓誌のうち四件 [047] [107] [140] [161] が②と判定される。これは、亳州譙郡にソグド人が存在していた可能性を示す一方で、墓主が「譙」と関係が深い曹氏、つまり曹参の子孫であることを暗示するという、中国特有の文化がソグド人の墓誌に現れていることを示している。

#### 第四節 世系の虚偽

それならば、上記の「譙」や「廬江」がソグド人の墓誌に記載されたということは、単にソグド人が河南地域にある亳州譙郡や廬江において漢人と雜居し、同地を本貫としていたことを意味しているのであらうか。

〈図表 10〉は、名望家を先祖としているか、もしくは先祖とまでは明記しないまでも、同姓の名望家を墓誌中に記載しているソグド姓墓誌を表にしたものである。二一件中十件が①或いは②で、ソグド人である可能性が高いことが墓誌の記載から確認できる。すなわち、名望家やその人物と連動している地域が墓誌中に記されるからといって、それだけでソグド人でないとはいえないのである。

墓誌中に先祖があたかも名望家であると記し、その人物と関連する地域を本貫とする現象は、何氏が①②合計八件中三件、曹氏が一

一件中六件に上っている。他の五姓と異なって、特にこの二姓に多くこのような状況が見られる原因は何処にあるのであろうか。まず考えられるのは、①と②の約五五%を占める安・米・康の三姓は唐代に世系のパターンがほとんどなく、祖を名望家とすることが困難であることである。さらには、何・曹と石・史との相異点に着眼すると、何・曹はソグド人が姓とする以外に主に漢人が姓とした（何はソグド人以外の非漢人はごく少数）のに対して、石・史の二姓はソグド人と漢人以外に、ソグド人以外の非漢人も姓にする場合があることが想起されよう。すなわち、伝統的な家格を重視する唐代社会において、何・曹の二姓は、何姓は廬江・唐叔虞、曹姓は譙・曹参というように、地名と名望家との結びつきが強く、どちらかに仮託することで簡単に中華の名族たる、漢人文化中に尊ばれる地位を得ることができたのである。一方で、石・史の二姓は、ある一定の地域や名望家への仮託が即ち漢人であることにつながらないために、世系にこうした偽りが少ないのであろう。

ソグド墓誌の記載中には、ソグド人であるという傾向が明白である一方で、漢人社会における名望家を世系に取り入れるというアンバランスな状態が示されているケースが存在した。これらは、ソグド人の漢人文化吸収の一面と言えるであろうが、今後は、ソグド人以外の非漢人の墓誌と比較検討する必要があるであろう。なぜならば、どうして特定の名望家を選び、それを墓誌に明記したのかに関しては、唐代の氏族系譜の由来、記される名望家の取捨選択の基準が何らかの形で関係してくる可能性が残されているからである。

## おわりに

本稿の考察の結果として、以下のことがいえるであろう。まず、対象としたソグド七姓は大きく二つのグループに分けることができるといふ点である。それは、a. 安・康・米の三姓と b. 石・史・何・曹の四姓である。

a. の三姓と b. の四姓のそれぞれを見てみると、a. の三姓を有する者は、『元和姓纂』『新唐書』などの文献史料からも、また墓誌資料においてもソグドであると考えられる①②が全体の約八五%を占めることから、安・康・米の三姓を有する者がソグド人である可能性は極めて高い。このことは、a. の三姓が墓誌以外の史料に現れる場合でも、彼らをソグド人と判断してまず差し支えないことを意味している。

一方、b. の四姓を名乗る人々については、これまでも、ソグド人以外にこれらの姓を名乗っているケースが知られていたが、この四姓の中でも、傾向はさらに二つに分類できる。曹・何姓はソグド人以外に主に漢人が名乗り、石・史の二姓は、ソグド人以外に、漢人・ソグド人以外の非漢人が名乗る。これは、曹・何の二姓の墓誌に、それぞれ「譙国曹参」「廬江唐叔虞」の後裔と仮託する傾向が強く見られる現象と符号するのである。その上、仮託している墓誌の中にも、ソグド人であろうと推測できるものもあり、名望家やその名望家と関係のある土地が記されている場合でも、ソグド人の墓誌が往々にして存在するのである。

ソグド人たちの墓誌は、中国への内附後も、特定の姓を名乗り、

ソグド人同士で婚姻関係を結ぶなどのソグド人であることを比較的支持する傾向を示す一方で、先祖を名望家に仮託するような中華の要素を取り込むという、矛盾したようにも見える状態が認められる。

「その人の西域出身たることが略推測される場合の外は、軽々しい断定をさねねばならぬ。」との桑原氏の指摘は首肯すべきであり、ソグド人と判定する際には「四周の事情」の確認が必須とされねばならない。本稿は、そのための初歩的な試みである。

## 注

- (1) 護雅夫『古代遊牧帝国』中公新書四三七 中央公論社 一九七六  
護氏はソグディアナ地方に、緩やかな同盟関係が結ばれていたのには、①北方民族に備える。②昭武という王家の支配を受けていたからとしている。
- (2) 羽田明「ソグド人の東方活動」『岩波講座 世界歴史六 東アジア世界の形成Ⅲ 内陸アジア世界の形成』一九七九ほか
- (3) 調査資料は以下の通りである。

- 『唐代墓誌所在総合目録』新版 唐代墓誌所在総合目録 氣賀澤保規 明治大学文学部東洋史研究室 汲古書院 一九九七
- 『現存唐代墓誌研究・総合目録の作成』吉岡真 一九九八
- 『石刻題跋索引』楊殿珣 商務印書館 一九四〇
- 『洛陽出土墓誌目録』洛陽市文物管理局 洛陽市文物工作队 朝華出版社 二〇〇一
- 『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本彙編』第一～三五冊 北京圖書館金石中州古籍出版社 一九八九
- 『唐代墓誌銘彙編附考』第一～一八冊 毛漢光撰 台灣中央研究院歷史語言研究所 一九八四～一九九四

『千唐誌齋藏誌』上下二冊 河南省文物研究所・河南省洛陽地区文管所 文物出版社 一九八九

『唐宋墓誌・遼東學院藏拓本圖録』香港中文大學中國文化研究史料叢刊二 饒宗頤 中文大學出版社 一九八一

『隋唐五代墓誌彙編』全三〇冊 天津古籍出版社 一九九一～一九二  
『洛陽出土歷代墓誌輯錄』洛陽市文物工作队 中國社會科學出版社 一九九一

『唐代墓誌彙編』『唐代墓誌彙編統集』周紹良 上海古籍出版社 一九九二～二〇〇一

『全唐文』董誥等 上海古籍出版社 一九九〇

『全唐文新編』周紹良 吉林文史出版社 一九九九  
『全唐文補遺』陝西省戶籍整理辦公室 吳鋼 三秦出版社 一九九四～二〇〇〇

『新中國出土墓誌』

陝西(壹・貳) 中國文物研究所 陝西省古籍整理辦公室 文物出版社 二〇〇〇～二〇〇三

河南(壹・貳) 中國文物研究所 河南省文物考古研究所 文物出版社 一九九四～二〇〇二

重慶 中國文物研究所 重慶市博物館 文物出版社 二〇〇二  
北京(壹) 中國文物研究所 北京石刻藝術博物館 文物出版社 二〇〇三

『吐魯番出土碑誌集注』上下二卷 侯燦・吳美琳 巴蜀書舍 二〇〇三  
『隋唐五代石刻文獻全編』國家圖書館善本金石組 北京圖書館出版社 二〇〇三

『固原南郊隋唐墓地』羅豐 寧夏回族自治州固原博物館 文物出版社 一九九六

『唐史道洛墓』原州聯合考古隊 勉成出版 二〇〇〇

\* 一九九六年『唐代墓誌彙編統集』の収録年限 から二〇〇四年七月ま



では、『文物』・『考古』・『考古与文物』の三雑誌で調査した。

- (4) 「薩宝」のほかに「薩保」「薩甫」とも記されることもある。
- (5) 榎一雄氏によると、植民聚落の形成はユダヤ教徒・アルメニア商人にも、共通して見られるという。「シルクロードの国際貿易 キャラバン貿易」「シルクロードの歴史から」研文出版一九七九
- (6) 藤田豊八「西域研究」『東西交渉史の研究 西域編及附篇』岡書院一九三三 三〇〇頁
- (7) 護雅夫 前掲『古代遊牧帝国』一八五頁
- (8) 羽田明 前掲『ソグド人の東方活動』四二六～四二七頁
- (9) 吉田豊「ソグド語雜録(Ⅱ)」『オリエント』第三二巻 第二号 日本オリエント学会 一九八九
- 「ヘシボジウム」中国の中央アジア人 シルクロード東端の発見」『MIHO MUSEUM 研究紀要』第四号 秀明文化財団 二〇〇四
- (10) 荒川正晴「北朝隋・唐代における「薩寶」の性格をめぐって」『東洋史苑』第五〇・五一号合併号 龍谷大学東洋史学研究会 一九九八
- 「ソグド人の移住聚落と東方交易活動」『岩波講座 世界歴史一五 商人と市場』岩波書店一九九九 八九・九四頁
- (11) ソグド姓は本研究で扱った七姓以外に、翟・支・畢・羅はソグド人が名乗っていた姓であることから、判断する際にはこの四姓を含めた。桑原隲藏 前掲『隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて』参照
- (12) 一九八三年同じく固原の李賢夫婦合葬墓(天和四(五六九)年埋葬)から出土。寧夏回族自治区固原博物館蔵。
- (13) 羅豊「固原南郊隋唐墓地」寧夏回族自治区固原博物館 文物出版社一九九六
- (14) 榮新江「北朝隋唐粟特聚落的内部形態」『中古中国与外来文明』生活読書新知三聯書店出版社 二〇〇一
- (15) 森部豊「後晋安万金・何氏夫妻墓誌銘および何君墓誌銘」『内陸アジア言語の研究』二〇〇一
- (16) 吉田豊 前掲「ソグド語の人名を再構築する」六八～六九頁
- (17) 池田温 前掲「8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」『ユーラシア文化研究』北海道大学文学部ユーラシア文化研究室 一九六五
- (18) 池田温 前掲「8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」六四頁
- (19) 吉田豊「ソグド語雜録(Ⅲ)」『内陸アジア原語の研究Ⅴ』(神戸市外国語大学外国語学研究二) 一九八九
- (20) 「史射勿墓誌」は埋葬年が、大業六(六二〇)年であるため、本研究の対象からははずれている。
- (21) 吉田豊「REVIEWS Corpus Inscriptionum Iranicarum. Part II: Inscriptions of the Seleucid and Parthian periods and of Eastern Iran and Central Asia. Vol. III: Sogdian. Part II: Sogdian and other Iranian inscriptions of the Upper Indus. By Nicholas Sims-Williams」 in *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 57/2, 1994, p. 391.
- (22) 森部豊「略論唐代靈州和河北藩鎮」『中国歴史地理論集 漢唐長安与黄土高原』陝西師範大学 一九九八
- (23) 桑原隲藏「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」『桑原隲藏全集 第二巻』岩波書店 一九六三 三
- (24) 桑原隲藏 前掲「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」二一九頁
- (25) 桑原隲藏 前掲「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」三二五頁
- (26) 桑原隲藏 前掲「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」三三六頁
- (27) 桑原隲藏 前掲「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」三三五頁
- (28) 安国出身と考えられる安姓のものでも、安息国出身であるとする場合がある。桑原氏は、『北史』卷九二における、安吐根は「安息胡人」とあるが、「曾祖入魏」という記載から、安吐根の曾祖が内附したのは五世紀半ばころであろうと判断し、この時期に安息国(バルティア(前二四七～後二二六))は存在していないので、安息人とするのは誤りであると指摘している(前掲「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」三一五頁)。内附の時期と安息国の存在した時期とを考慮することが必要であると考え

られる。今回収集した墓誌の中にも、『安萬通墓誌』(016)695永徽6.12.1)、『史索嚴夫人安娘墓誌』(028)696麟德1.11.16)、『安令節墓誌』(071)705神龍1.3.5)、『李(安)元光及妻阿史那氏墓誌』(109)794貞元10.11.28)の四件に見られたが、全て内附した時期が安息国の滅亡(二二六年)より遅いと考えられた。

(29) 『旧唐書』巻五五、李軌伝、『新唐書』巻八六、李軌伝に記載がある。

(30) 武威姑臧の安氏の他には、南宋の鄧名世による『古今姓氏書辯證』巻八には「河南安氏、後魏安遲氏改爲安氏」という記載があり、河南には北魏の安遲氏が安氏と改めた人々がいるということである。しかし、これに類似する記載があるはずの『魏書』官氏志には、安氏の記載はないため、桑原氏や『北朝胡姓考』を記した姚薇元氏は、共にこの記載は疑わしいとしている。

(31) 『安元壽妻翟六娘墓誌』(083)727開元15.2.29)も発見されている。妻の姓である「翟」はソグド姓の一つとされることから、ソグド人同士の婚姻であると考えられる。

(32) 康氏の記載は、『潜夫論』『風俗通』になく、『新唐書』にもない。『元和姓纂』巻五、康「衛康叔之孫、以諡爲姓也」という記載が最も古いものである。唐代以前に康姓を持つ人物は、『晋書』巻一〇二、載記、劉聰に「太史令康相」という人物が記載されているが、彼の出自は不明であるし、『梁書』巻一八、康絢伝の康絢は「康居の人」とあるのみで、桑原氏の指摘通り、隋唐以前の正史や『資治通鑑』中には康姓を持つ漢人はほとんどいない。また、安姓の者が「安息国人」とされることがあるように、康姓には「康居人」と記される場合がある。羽田明氏によると、ソグディアナ地方は、『史記』大宛伝・『漢書』西域伝などにあらわれる康居の勢力下であることが想定され(前掲「ソグド人の東方活動」四一六頁)、また『後漢書』(巻八八、西域伝、粟弋)には、「粟弋(ソグド)國屬康居」とあることから、墓誌に康姓で康居人となる場合には、即ちソグディアナ地方出身者であると考えられる。

(33) 『晋書』巻一四、地理志上、涼州  
元康五年、惠帝……又別立會稽・新郷、凡八県爲晉昌郡。

『通典』巻一七四、州郡典、瓜州

瓜州今理晉昌縣。古西域地。戰國時、爲月支所居。秦末漢初、屬匈奴、武帝以後爲燉煌郡地。後漢・魏・晉皆因之。後魏屬常樂・會稽二郡。後周屬會稽郡。苻堅徙江漢之人萬余戶於燉煌、中州人有田墾不闢者亦徙七千余戶。涼武昭王遂以南人置會稽郡、以中州人置江夏郡。後周因旧名置晉昌郡。隋唐之、以屬燉煌郡。大唐置瓜州、古瓜州、説在燉煌郡。或爲晉昌郡。

(34) 宋新江 前掲『中古中国与外来文明』六〇～六一・九一～九二頁

(35) 『潜夫論』『風俗通』『元和姓纂』『新唐書』に米姓の記載はない。米姓の記載がはじめて現れるのは『古今姓氏書辯證』巻三四「米 西域米国胡人。入中国者、因以爲姓」の記載である。また、『姓氏急就篇』巻上にも「米氏、胡姓」とあり、さらに『資治通鑑』巻二四八、唐紀の胡注には、「米姓出於西域、康居枝庶分爲米国、復入中国、子孫遂以爲姓」とあることから、米姓は米国出身者だけが名乗っていたことが推測できる。

(36) 桑原隲藏 前掲『隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて』三三六頁で、米姓は唐の中世から始めて支那の記録中に現れて来て、それは西域の胡人に限った。」と述べる。

(37) 『元和姓纂』巻一〇、石

衛大夫石碯之後。又石貽仲、衛大夫。生石祁子、見左伝。礼記、楚有石奢。鄭石癸、癸字申父。周石速。漢石商・石奮。奮生建・慶、号「万石君」。

【渤海】舊裔孫苞、晋司徒、樂陵公。生喬・統・越・峻・備・嵩。統孫瑛、趙司空、五代孫喬。卷五代孫瑛、唐虞部郎中。

【平原】厭次人、舊後、晋司徒石鑒。又魏部郎中石仲賢、宣州人、今居広陵。

【上黨】晋石勒、上党武郷羯胡也、晋元時僭位称王、都襄国、今荊州也。

子弘爲從兄季龍所殺自立、子鑒・遵並爲冉閔所殺。後趙六王三十四年。

【河南】後魏官氏志、烏石蘭氏改姓石。魏司徒・蘭陵公石猛。猛生銓。銓生真素・初平。素生蓀。蓀生儁・遠・詢。石儁生士濟、唐原州總管。詢生金剛、左司衛率。初平元孫抱忠、天官侍郎、今居號州。

(38) 【新唐書】卷二七一、石洪伝

石洪者、字濬川、其先姓烏石蘭、後独以石爲氏。

(39) 新旧両唐書以前の正史では、烏石蘭に関する記載は

【魏書】卷一一三、官氏志

噐石蘭氏、後改爲石氏。

(烏石蘭は噐石蘭の異訳。姚薇元 前掲『北朝胡姓考』一四三頁参照) と上記した『新唐書』卷二七一の記載のみである。

(40) 【北朝胡姓考】には、譚其驤氏の説「羯考」「長水集」上 人民出版社 一九八七に再録)に従つて、羯胡は匈奴の別部羌渠で、匈奴統治下の月氏族であり、その月氏が石国を建国したとも言われ、羯族とソグディアナ地方の石氏は同族とする説が記載されている。今回収集した墓誌中には、羯胡を称する石氏は存在しなかったが、本研究におけるソグド人とはソグディアナ地方を故地とする人々の後裔であり、かつ、出身聚落に由来する姓を有している者を対象としているので、羯族がたとえ同族であつたとしてもソグド人として扱う必要はない。

(41) 【新唐書】卷七四上、宰相世系表四上、史氏

史氏出自周太史佚之後、子孫以官爲氏。漢有魯國史恭。三子、高・曾・玄。高、大司馬・樂陵安侯。二子、術・丹。丹、左將軍・武陽侯侯。孫均、均子崇、自杜陵受封溧陽侯、遂爲郡人。崇裔孫宋栗鄉令瓊。

(42) 【元和姓纂】卷六、史

周太史史佚之後。以女弟爲周太子良娣、生史皇孫進。進生宣帝。恭子高・元。

【建康史氏】今隸酒泉郡、史丹裔孫後漢楊義侯苞之後、至晉永嘉亂、避地河西、因居健康。苞裔孫肇、後周安政公、生祥、隋城陽公。祥弟雲、

期。雲生令卿、唐祠部郎中・杭州刺史。

【宣城】丹孫均。均子崇、自杜陵受封溧陽侯、遂爲郡人。崇裔孫宋栗鄉令瓊。瓊九代孫務滋、唐納言・溧陽子。孫翹、御史大夫。又江州史史元道。又云崇之後也。

【高密】史丹之後、有史儁。儁裔孫節、唐礼部侍郎。

【京兆】丹裔孫瓊、留長安。隋左領大將軍万歳、狀称瓊十二代孫。宝、唐鄜州都督原国公。

【陳留考城】今隸曹州。後漢京兆尹敞、生瓊。今無聞。

【河南】本姓阿史那、突厥科羅次汗子、生蘇尼失。入隋、封康國公。懷德郡王。生大奈、子仁表、駙馬。生忠、左驍衛大將軍・薛國公。忠生哺、宋州刺史。哺生思元、右金吾大將軍。思元生震・晋・翼・秦・震、右監門將軍、生弘・寧叔・容。寧叔生儁。容・翼王伝。翼・光禄少卿。秦、蜀州刺史、生寅・審。審、吉州刺史。

(43) 森部豊 前掲『略論唐代靈州和河北藩鎮』

(44) 【新唐書】卷二七上、回鶻伝上、序言

回鶻、其先匈奴也、俗多乘高輪車、元魏時亦号高車部。この記載から北魏で高車と呼ばれていた人々は、そのもとは匈奴であり、唐代には回鶻(ウイグル)と呼ばれていたことが分かる。『北朝胡姓考』では「賀拔」には、『北史』卷六、齊本紀上や『北齊書』卷二、帝紀で「斛拔」との異同があるものの、賀拔氏は高車族であるとしている。

(45) 【北齊書】卷一九、賀拔允伝『周書』卷一四、賀拔勝伝・『新唐書』卷一、高祖皇帝本紀、武德三年 ほか

(46) 【何弘敬墓誌】(〔S. 1000〕成通の)の墓誌録文は、森部豊『唐魏博節度使何弘敬墓誌銘』試釈(吉田寅先生古稀記念アジア史論集)吉田寅先生古稀記念論文編集委員会 一九九七に従った。

(47) 羅豊『固原南郊隋唐中並史氏墓誌考釈(上)』『大陸雜誌』九〇—五 一九九五

(48) 森部豊 前掲『唐魏博節度使何弘敬墓誌銘』試釈 一四〇頁

(49) 盧兆蔭「何文哲墓誌考釈——兼談隋唐時期在中国的中華何國人」『考古』

一九八六一九

(50) 『新唐書』卷七五下、宰相世系表五下、曹氏

曹姓出自顓頊。五世孫陸終第五子安、為曹姓、至曹挾、封之於邾、為楚所滅、復為曹姓。唐有河南曹氏。

(51) 『古今姓氏書辨證』卷一一、曹

今望出譙國者、漢丞相平陽侯參始居沛國譙縣、望出金鄉者、唐御史中丞懷舜之後、出齊郡亭山縣者、唐金部郎中長史之後、出東海者、晉吏部尚書簡之後、出陳留者、晉陳留太守同之後、出清河者、晉清河太守泓之後、出鉅鹿者、魏太尉洪之後。

(52) 注(27) 参照